

柏原市埋蔵文化財発掘調査概要報告

1980年度

1981年3月

柏原市教育委員会

はしがき

わが柏原市は、金剛生駒山地を分ける奈良盆地の水を集めて先入蛇行し、大阪平野に流出する大和川、および金剛葛城の山々からの清流を集める石川と、古来清水にめぐまれた地として、また交通の要衝の地として栄えていました。めぐまれた自然と古い歴史や、伝統に培かわれた貴重な文化的遺産を今日に伝える町として知られています。

なかでも、祖先の人々の生活の記録である埋蔵文化財の包蔵地が全市的拡がりを示すことは、市域の環境の良いことを証明するものでしょう。

この調査概要報告書は、昭和55年度中に市内の埋蔵文化財包蔵地において実施した柏原市内遺跡群発掘調査のまとめです。

柏原市においては昭和55年度から、はじめて市独自の発掘調査を実施しえるような体制が形成されてきました。当然のことながら調査器材もなにもない状態からのスタートであったために、調査自体不十分なものであったことは不本意ながら否めないものでした。このないないづくしの間には、大阪府文化財保護課大井事務所から多大な援助をいただきました。記して謝意にかえます。

昭和56年3月

柏原市教育委員会

例　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、国庫補助事業（総額3,000,000円、国補助率50%、府補助率25%、市負担率25%）として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師 植村和弘、松岡良憲、柏原市教育委員会社会教育課、竹下 賢、北野 重、を担当者とし、昭和55年4月1日に着手し、昭和56年3月31日をもって終了した。
3. 調査の実施と整理にあたっては、以下の諸氏の協力をえた。

渡辺雅彦 伏井信之 新田康二 上田 瞳 広岡 勉 大塚淳子
奥野 清 道簇基藏 井上岩次郎 谷口鉄治 浦 廉吉 成山貞逸
高橋恵子
4. 本書の執筆は各々の調査担当者が行ない、遺物については大塚淳子が担当した。
5. 本書については整理作業途上で資料の一部が元市文化財担当嘱託職員によって持ち出されたまま返還されていないので、不十分な点があることを了解されたい。

目 次

は し が き

例 言

1980年度柏原市内発掘調査一覧

大県遺跡

- 80—立会調査..... 1
- 81—5次調査..... 2

大県南遺跡

- 80—1次調査..... 4
- 80—2次調査..... 8
- 81—1次調査..... 16

安堂遺跡

- 80—1次調査..... 24

高井田横穴墳群

- 80—2次調査..... 25

雁多尾畠古墳群

- 80—1次調査..... 27

玉手山遺跡

- 80—2次調査..... 36

田辺遺跡

- 80—1次調査..... 44

1980年度柏原市内発掘調査一覧（一部1981年度調査分を含む）

大県遺跡

| 年・次 | 所 在 地 | 面 積 m ² | 申請者 | 用 途 | 区 分 | 担当 | 調査期間 | 備 考 |
|-------|-----------|--------------------|-------|------|-----|----------|---------|-----------|
| 80・立会 | 平野1丁目125 | 750 | 福岡行謙 | 掩壁建設 | 国 庫 | 竹下 | 81.2.3 | 本書1ページ参照。 |
| 81-5 | 平野1丁目29-1 | 600 | 朝日工業㈱ | 工場建設 | 原因者 | 竹下 植村 | 81.1.17 | 本書2ページ参照。 |

大県南遺跡

| | | | | | | | | |
|------|-------------------------|-----|-------|--------|-----|----|-------------------|--|
| 80-1 | 大縣4丁目585-2 586-1・588 | 534 | 井戸 雅裕 | 本堂建設 | 国 庫 | 竹下 | 80.9.3~13 | 本書4ページ参照。 |
| 80-2 | 大縣3丁目353-1 | 200 | 山下丈太郎 | 個人住宅建設 | 国 庫 | 竹下 | 80.11.27~ 12.9 | 本書8ページ参照。 |
| 80-3 | 太平寺2丁目557 | 105 | 坂口 富治 | 個人住宅建設 | 国 庫 | 竹下 | 81.2.15~ 28 | 2×2mのトレンチを2ヶ所設定。現地表下0.2mで地山層を確認。遺構、遺物の存在は認められなかった。 |
| 81-1 | 大縣4丁目505-1 | 900 | 中野 俊雄 | 店舗建設 | 国 庫 | 竹下 | 81.4.1~10 | 本書16ページ参照。 |

安堂遺跡

| | | | | | | | | |
|------|----------|-----|-------|--------|-----|----|----------------|---|
| 80-1 | 安堂町645 | 166 | 安尾 勇 | 個人住宅建設 | 国 庫 | 竹下 | 80.7.8~15 | 本書24ページ参照。 |
| 81-3 | 安堂町664-1 | 612 | 山下 富哉 | 個人住宅建設 | 国 庫 | 田中 | 81.12.1~ 28 | 幅2m、6×8mのL字形のトレンチを設定。現地表下2mまで掘削。7C代の井戸と自然流路、8~9C代の人土の構造出。 |

高井田横穴墳群

| | | | | | | | | |
|------|----------|-----|-------------|--------|-----|----|----------------|---|
| 80-1 | 高井田651-2 | 204 | 加藤 春彦 | 個人住宅建設 | 国 庫 | 竹下 | 80.6.5 | 2×5、0.8×0.8mの2ヶ所のトレンチを設定。現地下0.7mまで掘削したが遺構は認められなかった。須恵・土師器の鱗片少量出土。 |
| 80-2 | 高井田 | 91 | 柏原市水道局 木田 好 | 上水道管埋設 | 原因者 | 北野 | 80.7.12~ 21 | 本書25ページ参照。 |

雁多尾畠古墳群

| | | | | | | | | |
|------|------------------------|----|-------|---------|-----|----|----------------|------------|
| 80-1 | 雁多尾畠3842~ 3844~3847 | 50 | 高津賀次郎 | キャンプ場建設 | 国 庫 | 竹下 | 80.10.1~ 20 | 本書27ページ参照。 |
|------|------------------------|----|-------|---------|-----|----|----------------|------------|

玉手山遺跡

| | | | | | | | | |
|------|--------------------|------|-------|------------|-----|----|------------------|--|
| 80-1 | 玉手町115-64 | 155 | 仲田 好希 | 個人住宅建設 | 国 庫 | 竹下 | 80.5.28~ 30 | 6×2mのトレンチを2ヶ所設定し現地表下2mまで掘削したが遺構は認められなかった。須恵・須恵器等の鱗片出土。 |
| 80-2 | 旭ヶ丘1丁目428~ 1-4倍 | 1200 | 柏原市 | 老人福祉センター建設 | 国 庫 | 竹下 | 80.9.16~ 10.3 | 本書36ページ参照。 |

田辺遺跡

| | | | | | | | | |
|------|-----------------|-----|-------|--------|-----|----|------------------|------------|
| 80-1 | 田辺2丁目4590~ 3 | 813 | 松本 彰一 | 個人住宅建設 | 国 庫 | 竹下 | 80.7.25~ 8.18 | 本書44ページ参照。 |
|------|-----------------|-----|-------|--------|-----|----|------------------|------------|

国分尼寺跡

| | | | | | | | | |
|------|-----------------|-----|------|--------|-----|----------|-----------|---|
| 80-1 | 国分東伯町2481~ 3 | 160 | 山口 遼 | 個人住宅建設 | 国 庫 | 竹下 松岡 | 80.4.9.10 | 1×4mのトレンチを2ヶ所設定。現地表下0.7mまで掘削。遺構、遺物の存在は認められなかった。 |
|------|-----------------|-----|------|--------|-----|----------|-----------|---|

大県遺跡

81-立会調査

・調査地区所在地

柏原市平野1丁目125

・調査担当者

竹下 賢

・調査期間

昭和56年2月3日

・調査面積

750m²

調査の概要

当該地の北200mには平野（ひらの）遺跡があり、南400mには大県（おおがた）遺跡が存する。いづれも弥生時代の遺跡の中心地として周知されていた。しかし、遺跡の範囲については拡張される可能性が考えられるものであった。このため、遺跡近隣の地における遺構・遺物の有無およびその地表面からの深さ等の資料をえるため土木工事に際し立会して遺跡範囲の確認につとめようとした。

昭和56年2月3日大橋建設から工事着手の連絡を受けて現地におもむいたところ、既に計画地盤（標高約20mを測る東高野街道から4m下）までの掘削が行なわれており、一部には基礎用割り石が散かれつつあった。掘り上げ土中に遺物の存在を認め、掘削地盤面は黒色細砂含み粘土で遺物包含層であることが確認された。包含層の下層面を知るため地盤面の一部を掘削する必要を認めたが工事は進められており、柏原市教育委員会として即刻調査しえる体制もとれなかったので、掘削地盤面に現認できる遺物を採集するに留まった。その結果として、わずかに、一袋分の遺物が採集されたのみであったが、包含層中には古墳時代と弥生時代の遺物の存在が確認された。この遺物の発見を根拠にこの地区を大県遺跡の範囲内に包括することとした。

遺物

弥生式土器が2点出土している。壺の胴部と壺の底部である。ともに第IV様式のものである。壺は外面を細かいハケ目で整形し、内面はヘラ削りする。内面に煤の痕跡が残る。他に瓶が1点出土している。口径27.3cmを測り、底部を欠損する。内外面ともにハケ目調整を行なう。時期は5世紀代に比定できる。



図-1 調査地区附近地図

大 島 遺 跡

81—5次調査

- ・調査地区所在地 柏原市平野1丁目29—1
- ・調査担当者 竹下 賢 植村和弘
- ・調査期間 昭和56年1月17日
- ・調査面積 18m² / 600m²

調査の概要

朝日工業株式会社では社屋改築の計画があり、当該地が地盤軟弱のため、パイロット打撃法を考へられていた。この計画についての事前協議の結果、とりあえず試掘調査を実施して、遺構・遺物の存在を確認した上で本発掘調査の進め方について改めて協議をすることとなつた。協議および試掘調査には大阪府文化財保護課植村和弘技師をわざわざわざらわした。

試掘調査は朝日工業の改築予定地の側に3×3mのトレンチを2ヶ所設定した。

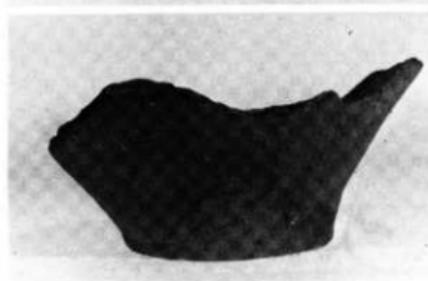
第1トレンチでは現地表面から約60cm下で黄色砂質層となり、下層にはひとかかえもある石が堆積していた。生駒山地西麓に広がる小丘状地の崩壊部にあたるものと判断されるが、大きな石層の下層については調査がよんでもないのでより下層の状況については不明である。第2トレンチでは現地表下70cmで黒色砂質混じり粘質土となり遺物の包含層と認められた。掘削は130cmまで進めたがそれ以下にも包含層は続いていた。

第1トレンチは約10mの距離をもって、第2トレンチより西・恩智川寄りに設定したものである。この試掘調査によって大県遺跡の西への広がりは一応恩智川をもって西限とみることが妥当と考えられるものとなつた。

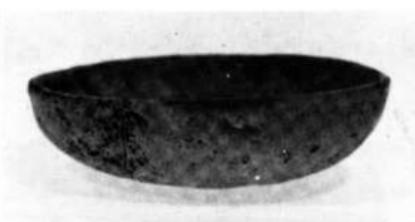
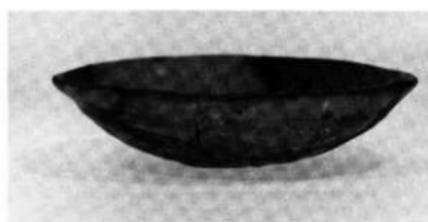
試掘調査後に、全面発掘調査について協議を実施したが、朝日工業側において改築工事計画の早期実施の要がなくなったとのことで後日とすることになった。

遺 物

土師器、瓦器碗等が出土している。土師器の杯は口径10.6cmを測る内面に放射暗文をもつタイプのものである。瓦器碗は口径15.2cm、器高指數23を示し、見込みに渦巻き状の暗文を施す。断面三角形の低い高台をもつ。



80—立会調査出土弥生式土器・土師器



81—5次調査出土土師器

大県南遺跡

80-1次調査

・調査地所在地

柏原市大県4丁目585-2他

・調査担当者

竹下 賢

・調査期間

昭和55年9月3日～9月13日

・調査面積

45m² / 534m²

調査に至る経過

昭和55年8月26日に当該地において掘削重機を使って試掘調査を実施した。この結果、地表下約1m以下に7世紀代の遺物包含層が存することが知られた。このため遺物及び遺構の性格を把握するため発掘調査をすることとしたものである。調査着手については作業員の手配について大阪府文化財保護課植村和弘・一瀬和夫・松岡良憲技師の配慮をえて9月3日から発掘調査をはじめた。なお、上野建築事務所から掘削重機の提供があり、表土層のすきとりと埋め戻しを担当していただいた。

調査経過

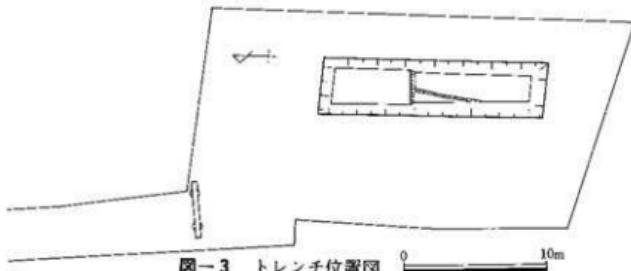
建築予定地に南北15m、東西3mの調査区を設定し、盛土及び旧耕土層の1mを掘削重機ですきとりをした後、遺物包含層を掘り下げていった。

耕土層を取り除いたところ調査区の北側に人頭大の石だまりがあり、そこから南に延びる石列が検出された。耕地であった時の水抜きのために構築された暗渠と判断された。

遺物包含層からは須恵器・土師器が出土したが、その出土状況はいずれも細片で自然堆積土層中に流入したような状態で認められるものであった。湧水が多く調査区の西側にス



図-2 調査地区附近地図



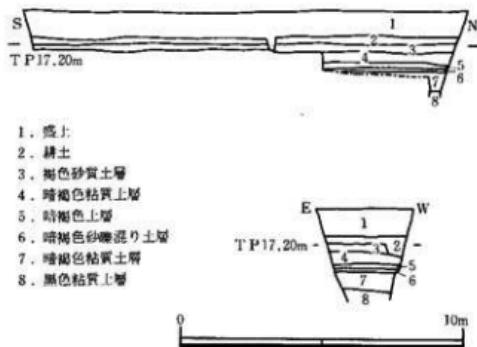


図-4 東南隕土層断面図

時期については出土遺物からみて7世紀代のものと判断した。

遺 物

1は上師器の杯。2は土師器の鉢。球形の体部から口縁部へと内傾する。口縁端部はやや上方を向き丸くおさめる。体部外面を荒いヘラ磨きで仕上げ、底部はヘラ削りする。3は高杯の脚部。平らな杯底部にはラセン暗文を配する。柱状部は9角形に面取りし、縁部内面は荒いハケ目調整を行なう。とともに7世紀末の時期のものか。4～6は上師器の盤である。4は小型のもので、口縁部はゆるく外反する。5・6は口縁部が「く」の字に外反し、体部外面はハケ目調整。6は口縁端部を上方につまみあげる。7・8は須恵器の杯蓋。共に偏平な型で周縁の端部は下方へ短く屈曲する。8は天井部中程に一条の沈線を巡らす。

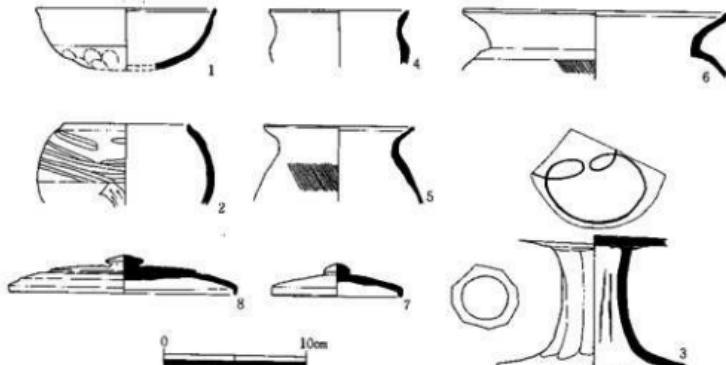
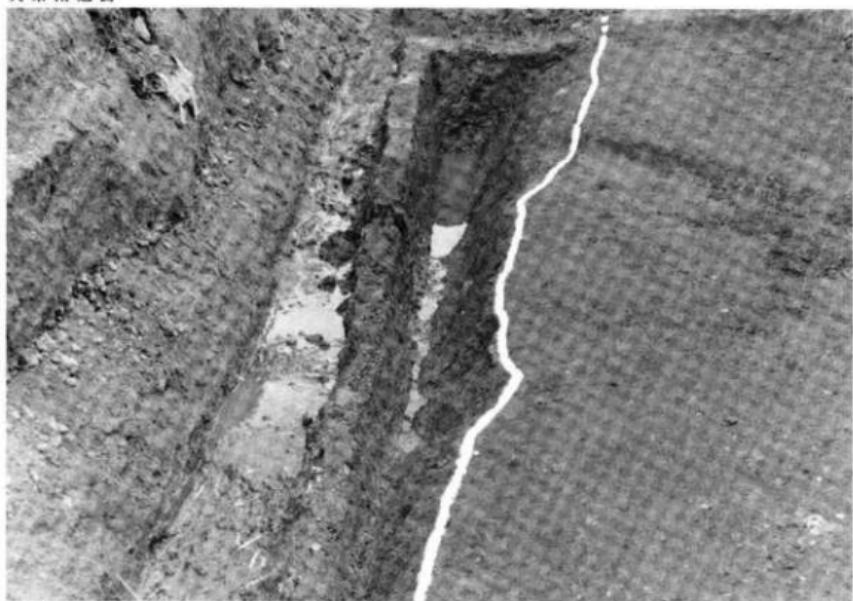
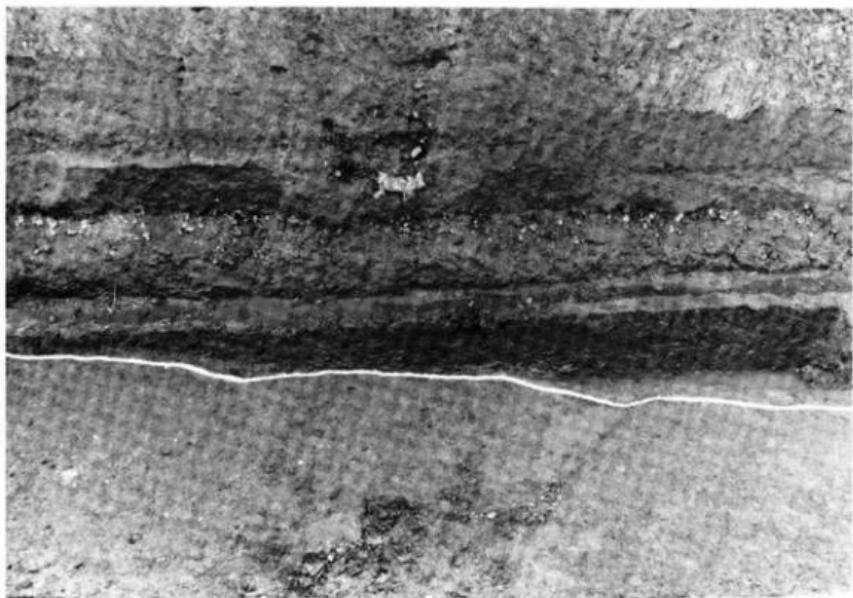


図-5 出土土器実測図

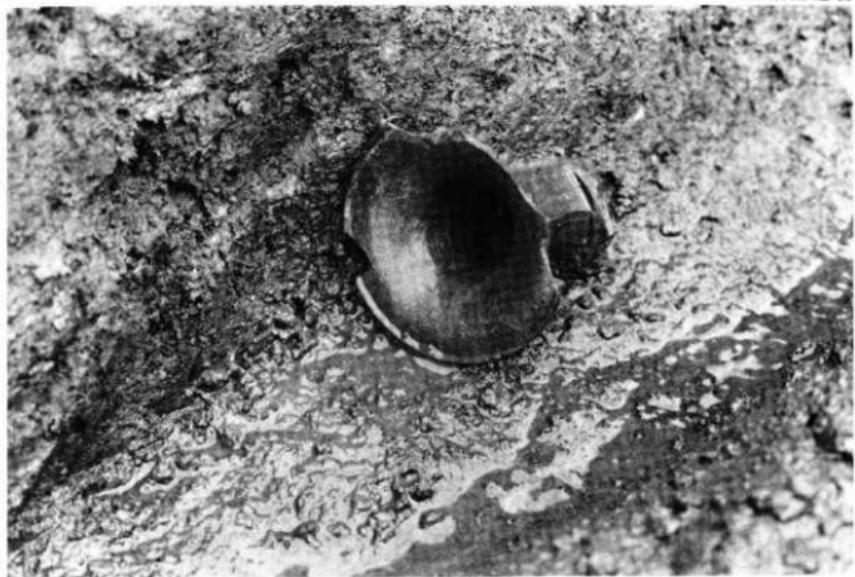
コップひとつ幅の水抜き溝を掘って調査面の水を抜きながらの調査となつた。約1.5mにおよぶ遺物包含層中では遺構の存在は認められず、ほりおえた段階で遺構の検出に努めたところ、西側に掘った溝と重なる状況で南北にのびる溝の肩が検出された。溝については幅67cm・深さ36cmの数値をえたのみで、その性格や目的については明確にしえない。



溝状造構検出状況



溝状造構検出状況



遺物出土状況



3



7



8

出土遺物

80-2次

- ・調査地区所在地 柏原市大県3丁目353-1
- ・調査担当者 竹下 賢
- ・調査期間 昭和55年11月27日～12月9日
- ・調査面積 9m² / 200m²

調査に至る経過

個人住宅建設の中請にともない柏原市教育委員会で試掘調査を実施したところ古墳時代から歴史時代におよぶ土師器・須恵器・瓦器等の遺物の存在を認めたので、大阪府文化財保護課大井事務所において植村技師と協議の結果、発掘調査を柏原市教育委員会で実施することとなった。

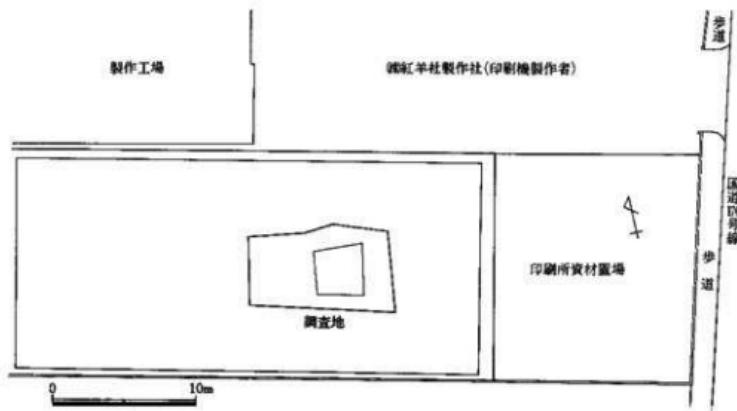


図-6 調査区位置図

調査の概要

調査は建設予定地の東端に3×3mのトレンチを設定して実施した。試掘調査結果に基づいて遺物包含層上面の現代の堆積土層である現地表下1m余りの土を掘削重機を使用して掘削し、以下を人力で発掘した。

発掘調査の結果、現地表下1.6m～2.6mの間に遺構面が重層的に存在することが確認された。これら遺構面の帰属時期は上層から近世・中世・古代（8世紀代）・古墳時代（6世紀後半）・古墳時代（6世紀初頭）となり、五時期と考えられる。特に中世遺構は土塙墓群と考えられる。土壇は調査区内で8ヶ所検出されている。土壇の周辺および土壇内から

は大量の遺物が出土した。なかでも、灯明皿がその大判を占めるものである。灯明皿は重ね置いたものが倒れたような状況で出土している。そのほか、遺物としては瓦器碗・皿が量的にあげられる。国产陶器と輸入磁器も出土している。中世以下の包含層からは須恵器・土師器片が出土している。

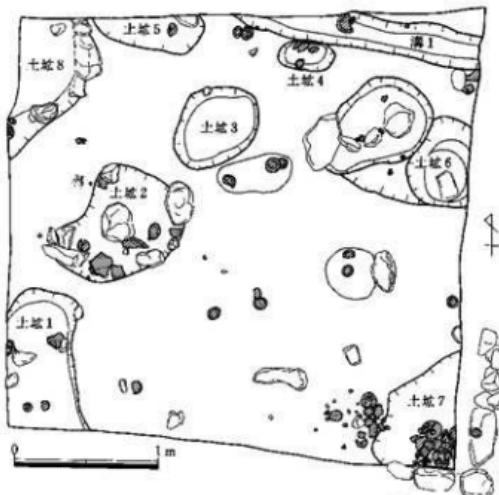
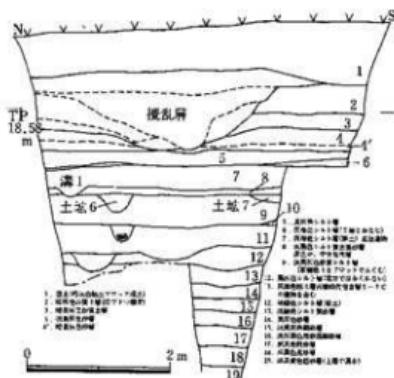


図-7 遺構平面図



遺物

・土師器

1～16は小皿である。総数1600枚余りある。口径10cm以上、器高2cm以上を測る大型のもの(14～16)と口径7～9cm器高1～2cmまでの小型のもの(1～13)に大別できる。小型のものには、平坦な底部からやや内弯して口縁部へとづくタイプのもの(1～8)と、底部と体部の境に強いヨコナデを施すために稜を持つタイプのもの(9～13)とがある。大型のものは、平坦な底部から斜め外方に口縁部が直立し、内外面共に強くヨコナデを施すために稜をもつ(14～16)。出土量は小型の稜をもつタイプのものが圧倒的に多く、1400枚余を数える。大型のものには、底部から内弯気味に口縁部へとづくタイプのものは見られない。色調は淡褐色～淡黄褐色を呈する。胎土は細かい砂粒を含むが精良なものが多く、総てのものに角閃石や雲母が見られる。17は小型の高杯である。杯部は平らな底部から口縁部を上方につまみあげる。脚部は太く中程で屈曲してひらき、指押さえの痕跡をとどめる。18は皿で底部に指頭圧痕が残る。17と共に先の小皿と同様な胎土・色調を呈する。

・須恵器

19は杯蓋。偏平な型で、周縁の端部を下方へ屈曲させる。

・瓦器

20～26は口径11.2cm～13.3cm、器高2.9cm～3.8cmを測る椀である。器高指数(器高に対する口径の百分比)30以下のものがほとんどである。20・21・23は痕跡的な高台をもつ。見込みに渦巻き状の暗文を施すもの(22・25・26)と渦巻き状とラセン状の暗文を合わせるもの(20・23・24)と暗文を施さないもの(21)がある。外面は底部から体部まで指押さえで口縁部にヨコナデを施す。27は小皿である。

・磁器

1・2は共に龍泉窯系の青磁碗。体部外面に削り出しの蓮弁文を有する。2の高台は断面方形を呈し、底部の器壁の厚さは1.7cmと厚い。灰色を呈し、やや砂粒を含む。淡緑色から淡黄緑色の釉を内外面に厚く施す。高台内側は無釉。

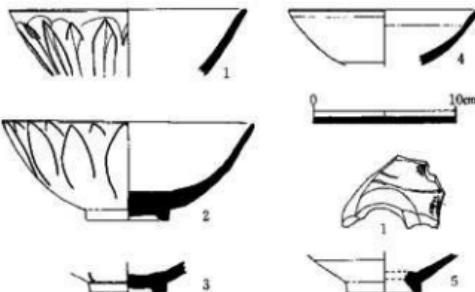


図-9 出土土器実測図

壺付きの部分は一部釉が流れた状況で付着している。時期は13世紀末から14世紀初めの頃のものか。4は碗の口縁部。内外面に緑褐色の釉を施す。一部褐色を呈し、灰をかぶったように白い斑点が散る。施釉は薄く、透明感のある艶はない。3・5は碗の底部。3は断面方形の高台、5は断面台形の高台を有する。3は褐色の釉を内面及び高台近くまで施し、一部は骨付き部にまで流れる。胎土は淡灰色から淡黄褐色を呈し、焼成がややあまく、軟質である。5は淡緑色の釉を内面に施し、やや荒い。見込みにヘラ描きの文様と櫛目状の工具による列点文を有する。

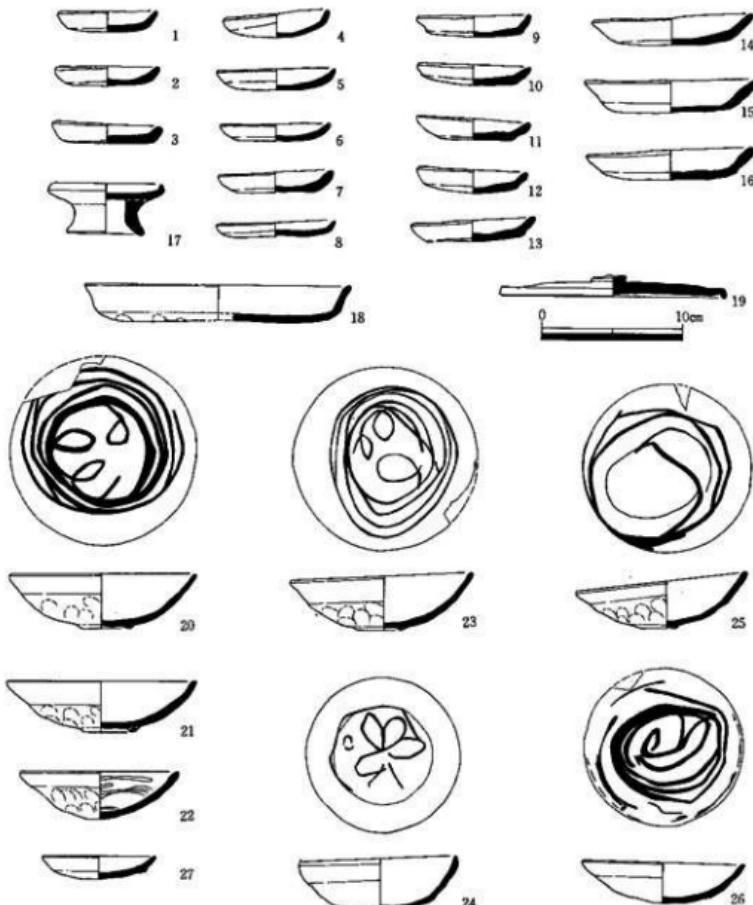
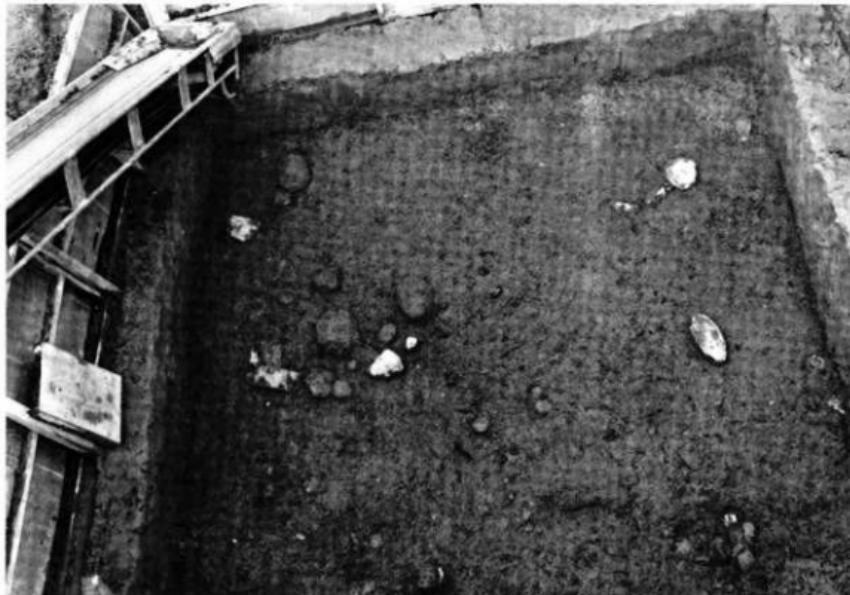


図-10 出土土器実測図



第2遺構面上層



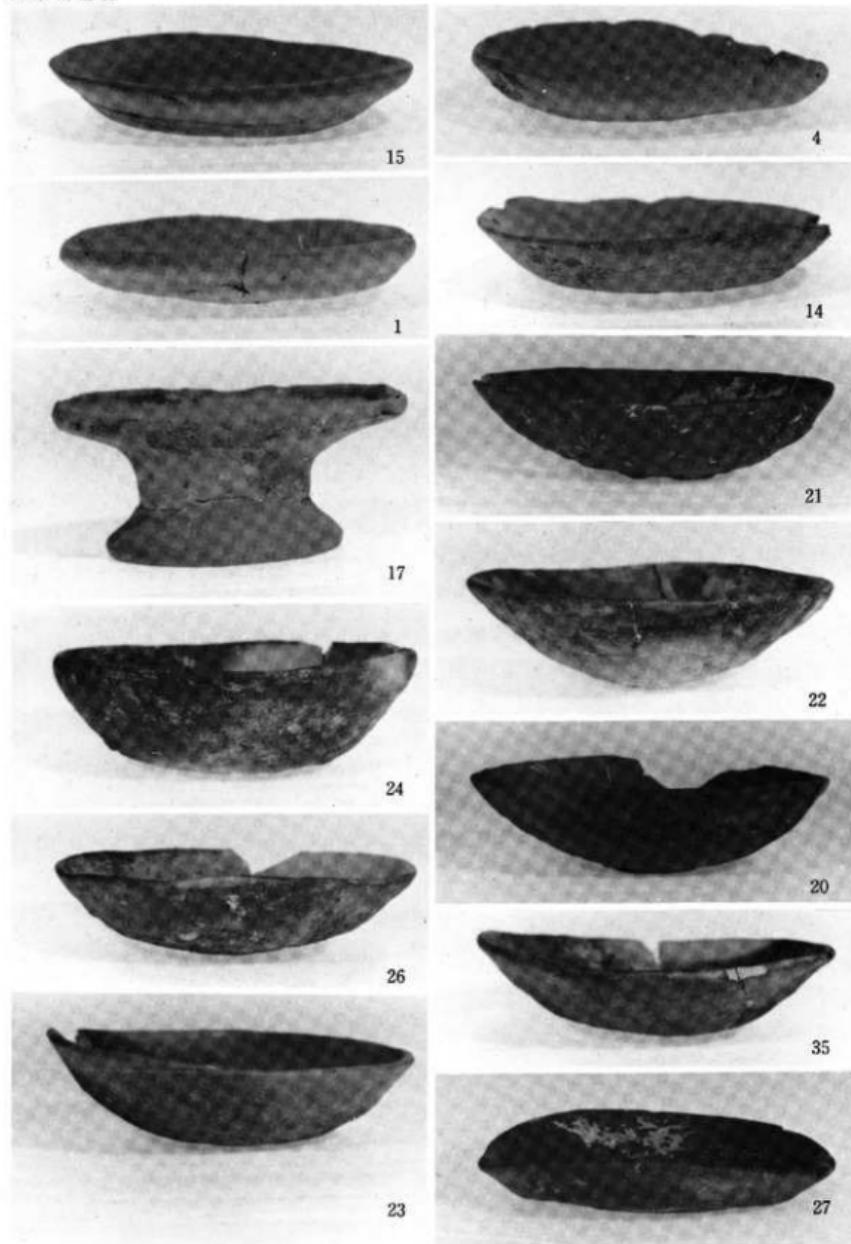
第2遺構面

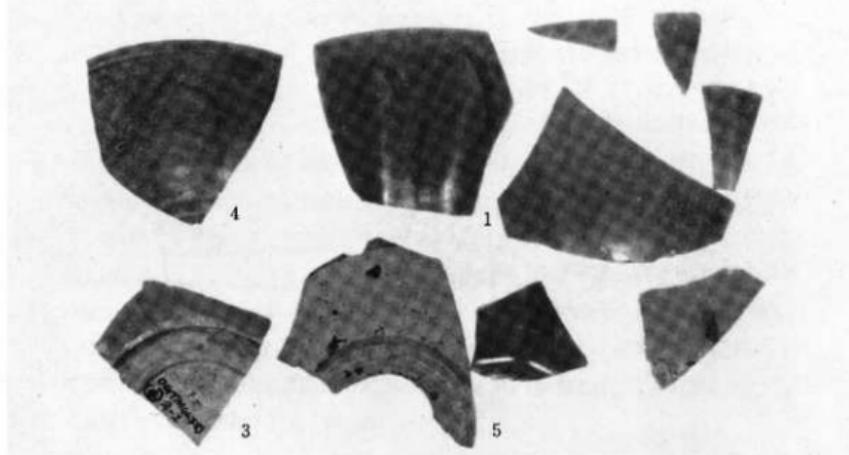
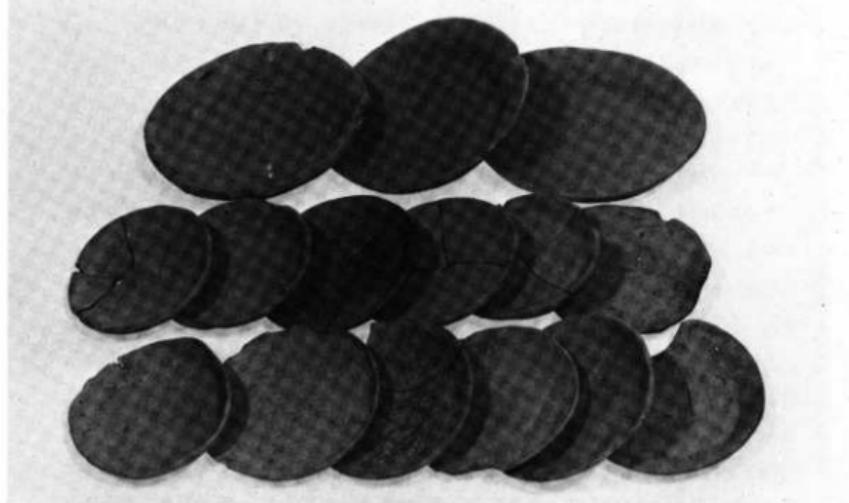
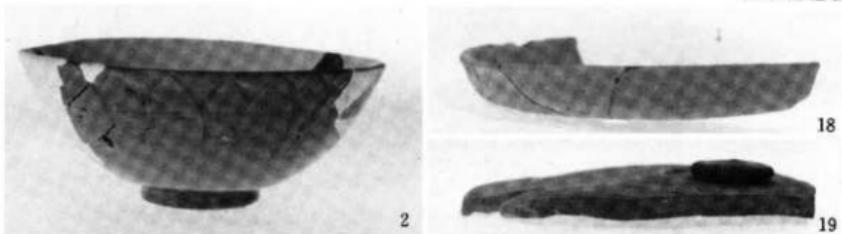


第2造構面遺物出土状況



土壤7遺物出土状況





81-1 次調査

- ・調査地区所在地 柏原市大県4丁目505-1
- ・調査担当者 竹下 賢
- ・調査期間 昭和56年4月1日~10日
- ・調査面積 16m² / 900m²

調査の概要

調査は建設予定地の各隅に 2×2 m のトレンチを設定し、これを掘削することとした。東南隅・T-1、西南隅・T-2、東北隅・T-3、西北隅・T-4と各トレンチを呼称することとした。

各トレンチ共に最近まで使用した耕作土および床土層を最上層とし、T-1・T-2・T-4においてはその下方に淡褐色砂質シルト層が遺物包含層として認められる。T-3においては床土下方に褐色砂質シルト層・淡褐色砂質シルト層・暗青灰色粘土層の堆積があり、いづれの層も遺物を包含するもので、包含層の厚さは 2 m を越えるものと考えられる。

T-1 では奈良時代を中心とした遺物が多く出土している。

T-2 では中世遺物の包含層があり、下層からは奈良時代遺物の出土があった。

T-3 では包含層の上層から古墳時代後期（6・7世紀）の遺物を多数出土している。

T-4 では鎌倉時代を中心とした遺物が多く出土している。

各トレンチ内における造構については明確には把握されていないものである。包含層のあり方からみる限りにおいて、重層的な造構面の存在が考えられる。緊急調査の性格から調査面積を最小にしたため、安全面から調査深度に制限があり、地山層までの掘削をしていないので、より下層の状況については今後の調査に期待されるものである。出土遺物としては中世の遺物としては瓦器・陶磁器等で、当時の生活用具がほぼ認められ、土師器・須恵器等では 6 世紀代から 9 世紀代までのものが認められる。

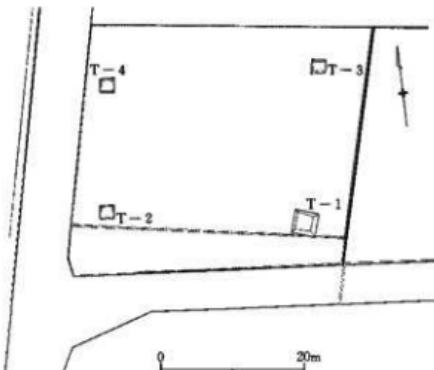


図-11 造構平面図

遺 物

• 土器器

1・2・4は杯。1・2は外面はともに口縁部近くまでヘラ磨き、底部はヘラ削りする。1は内面上段に斜放射状暗文、下段にラセン状暗文を施す。2は上段に斜放射状暗文を施し、一部クロスさせている。下段には正放射状暗文を配する。口縁部端部は内側につまみ上げる。3は鉢。外面は口縁部近くまでヘラ磨きを行ない、底部はヘラ削りする。内面は非常に丁寧な横ナデを底部から口縁部にまで均一に行なう。ロクロによるものか。5～7は皿。8は手づくねの高杯。脚部を指で上から下へナデおろしている。9は小型丸底壺である。指押さえとハケ目で調整する。口縁端部は外側へつまみ出す。10は瓶の口縁部である。内面を下から上へヘラ削りする。11は大型の鉢。全体をナデで仕上げる。12は羽釜。口縁部は外側へ短く屈曲し肥厚する。鉢は短くやや上方を向く。13は「く」の字に外反する大型の甕の口縁部である。端部を外側下方へつまむ。色調は5は灰褐色を呈し、他はすべて赤褐色を呈する。

• 須恵器

杯蓋は偏平なもの（16・17・19）と丸みをもつもの（14・15・18）が出土。15・18は天井部にヘラ記号文をもつ。20～22は杯身。21・22は立ち上がりが短く内傾する。23・24は高杯の杯部。23は有蓋高杯である。25は直口の鉢。底部から内寄して口縁部へとづく。底部は回転ヘラ削りを行なう。26は平底の杯。27～29は杯蓋。27・28は内面にかえりを有し、宝珠つまみをもつ。29は周縁端部を乘下させる。30～33は高台をもつ杯である。色調はすべて灰白色を呈し、焼成はやや軟質である。34は短頸の小型の壺である。口縁部端部を逆「く」の字状に屈曲させる。最大径に一束の沈線を巡らせる。35は平底の直口の鉢である。口縁端部は薄くやや外反する。36は平瓶である。口縁部を欠損する。肩部にやや丸みをもち、ナデの下にカキ目を施す。37～39は甕の口縁部。38は口縁部を外側に折り込む。37・39は外面にカキ目を施し、内面に同心円の叩きを行なう。

• 瓦器

41は断面台形のしっかりした高台をもち、外面は口縁部近くまでヘラ磨きする。見込みに格子状の暗文をもつ。器高指数は39。40は断面三角形の高台をもち、外面は口縁部近くまで指押さえが残る。見込みに格子状の暗文をもつ。器高指数は36である。43・44は高台部を欠くが器高指数は30をこえる。43は外面の口縁部近くをヘラ磨きし、見込みに格子状の暗文をもつ。44はラセン状暗文を見込みに2段に配する。42は口径13.2cmを測る。断面三角形の低い高台をもち、器高指数は26である。外面にヘラ磨きは施さず、見込みにヘラ幅の太い暗文と細い暗文を合わせもつ。45は高台がつかず、器高指数も25と低い。見込みに渦巻き状の暗文をもつ。

・製塙土器

製塙土器が多数出土したが殆どが破片である。口径 5 cm、器高 10 cm 前後のものである。器壁は 2 ~ 5 mm と薄く、丸底で胴部にやや脹らみをもち、口縁部がすぼむ。外面は叩きにより調整するものと、掌文がのこるものとがある。時期は 6 世紀代に比定できる。

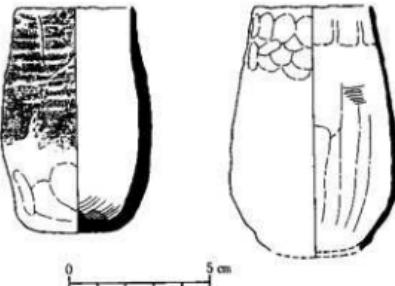


図-12 出土土器実測図

・砾石

断面が長方形を呈するものと六角形を呈するのが 2 点出土している。ともに 6 cm 前後の棒状で一端を折損する。断面長方形のものは長辺 2 面を、六角形のものは 4 面を研磨面として使用している。ともに一部に火を受けた痕跡をとどめる。

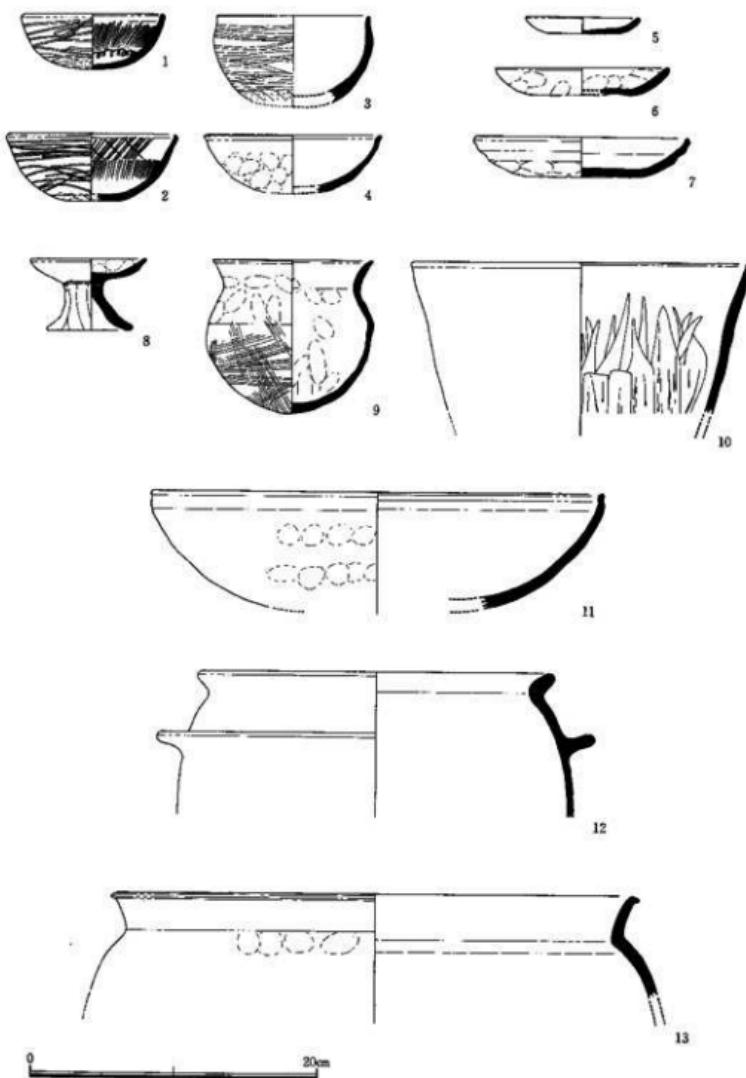


図-13 出土土器実測図

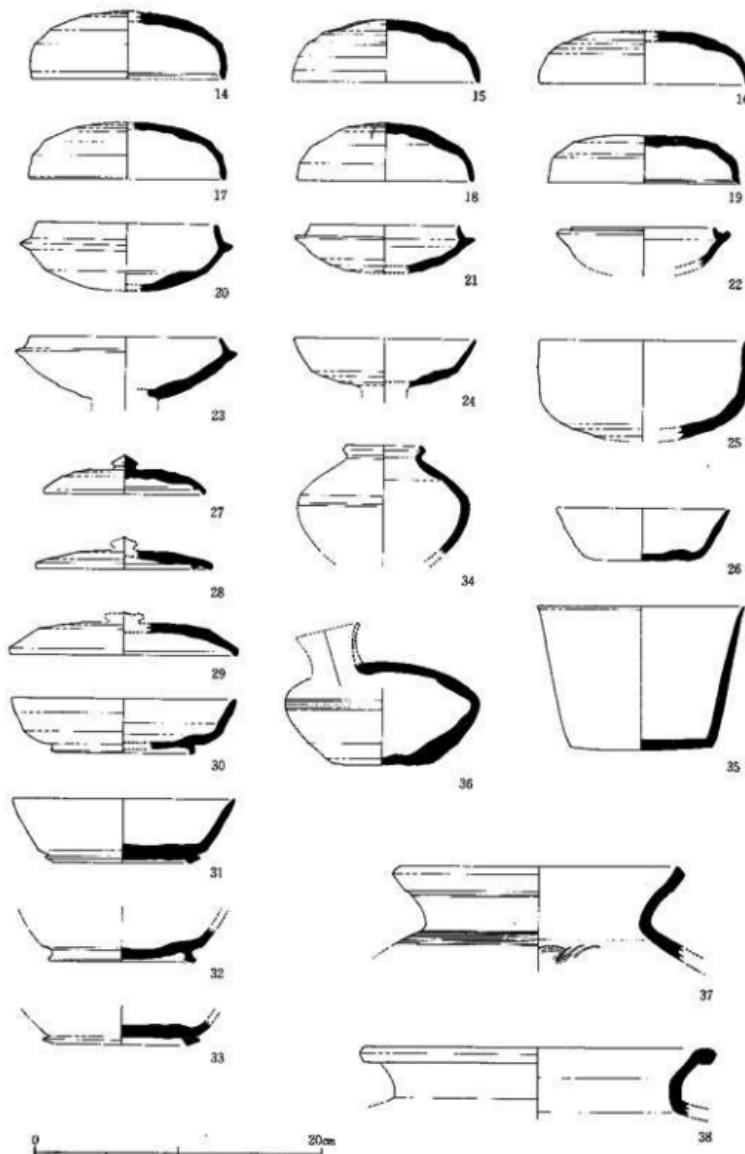


圖-14 出土土器尖測圖

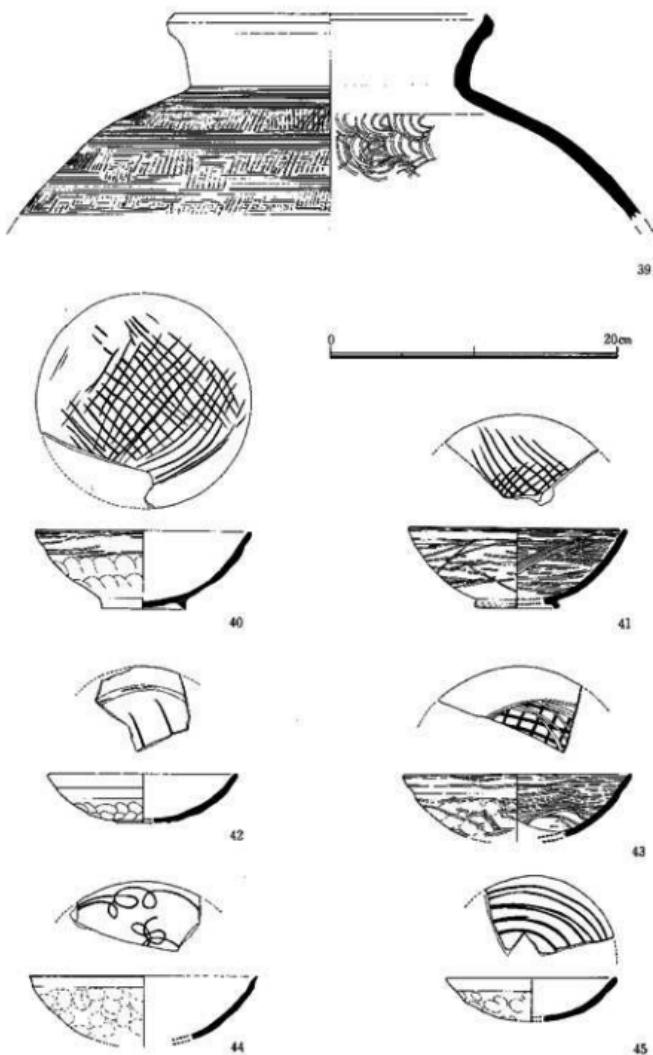


図-15 出土土器実測図



1



35



8



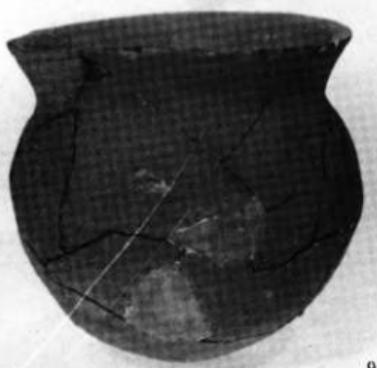
36



3



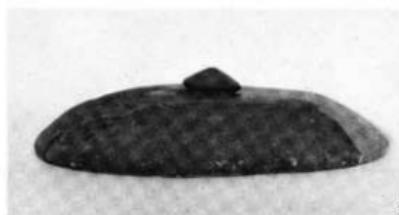
18



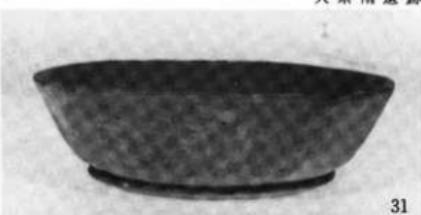
9



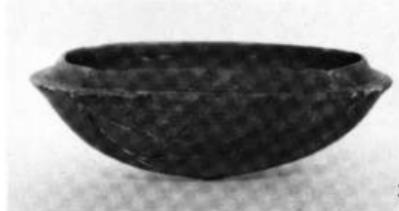
15



27



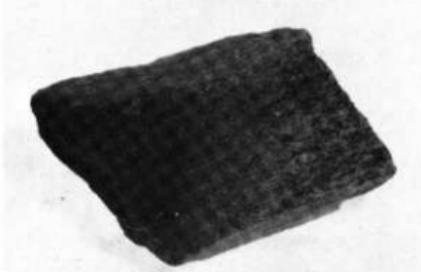
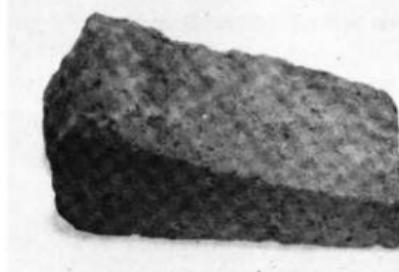
31



23



40



1 : 1



1 : 1
出土遺物

安堂遺跡

80-1次調査

・調査地区所在地

柏原市安堂町645番地

・調査担当者

竹下 賢

・調査期間

昭和55年7月8日～15日

・調査面積

17m² / 166m²



図-16 調査地区附近地図

調査概要

個人住宅建設に伴う事前緊急発掘調査で建設予定地の東側に東西2m・南北4mのトレンチと西側に3×3mのトレンチを設定した。両トレンチとも現地表面から140cmの深さまで掘削した。この間における層序は黒色粘質土が堆積していた。西側トレンチから直径20cmを測る掘っ建て柱跡を検出した。この柱穴の埋土中から五世紀末葉と認められる須恵器片が一片出土した。掘っ建て柱建物の時期を示唆するものとみてよいであろう。

当該調査地は河内六寺中の家原寺の塔跡から南東60mの距離をもつもので、寺域内に当たるものと考えられ、寺院跡関係の遺構・遺物の存在が予測されたものであった。調査結果としては寺院関係の遺構・遺物が認められなかったので、寺城外に位置するものと考えられる。従って、家原寺の寺域は本調査区の東にあたるものとみられ、家原寺は現安堂町の中心地点に限定しえるものと判断される。細片であるが、弥生式土器が堆積土層中から出土していることを資料として書き加える。



高井田横穴墳群



図-17 調査地区附近地図

80-2次調査

- ・調査地区所在地 柏原市高井田
- ・調査担当者 北野 重
- ・調査期間 昭和55年7月12日～21日
- ・調査面積 91m²

柏原市水道局は、市道高井田・山崎線の道路敷内に水道管布設工事を計画した。当地区は高井田古墳群内にあたり、同道路北側に接する修徳学園には多くの古墳が存在する事から、水道局から依頼を受けた柏原市教育委員会が工事に先立つ緊急発掘調査を実施した。

同地区は生駒山地最南部にあたり直ぐ南側下方に大和川が流れる。南向きの緩斜面地である。道路は、標高28～35mの東側に向かって軽い昇り坂になっており、東西方向にはほぼ直線的に走る。道路は既に造成工事により削平や盛土を施しており、調査は周辺の地形と照らしあわせて遺跡の存在する可能性の高い場所のみに限った。

調査は、全長120m、幅約0.7mの範囲のトレンチにおいて実施した。土層は、0.5～1.1mの盛土があり、その下層は、薄茶灰色砂質土及び黄褐色粘質土の遺物包含層が20～50cmの厚さで見られた。遺構は方形ピット1、2と南北方向の溝1～6を検出した。溝1は、横幅1.5m、深さ0.3mである。土師器が出土したが岡化出来なかった。溝3は横幅0.6m、深さ0.4mである。遺物は円筒埴輪の破片が出土した。タガは断面三角形ないし台形の退化したような粗雑な作りでタテハケを施す。ピット1、2のある位置は、南向きの斜面地でなだらかな尾根上にあたる。溝6は横幅1.5～3.0、深さ0.5mを測る。傾斜変換点にあたる溝である。土師器、須恵器が出土。今回の調査によって周辺に古墳の存在が予測されるものである。遺構の性格については、今後の調査が待たれる。

高井田横穴墳群

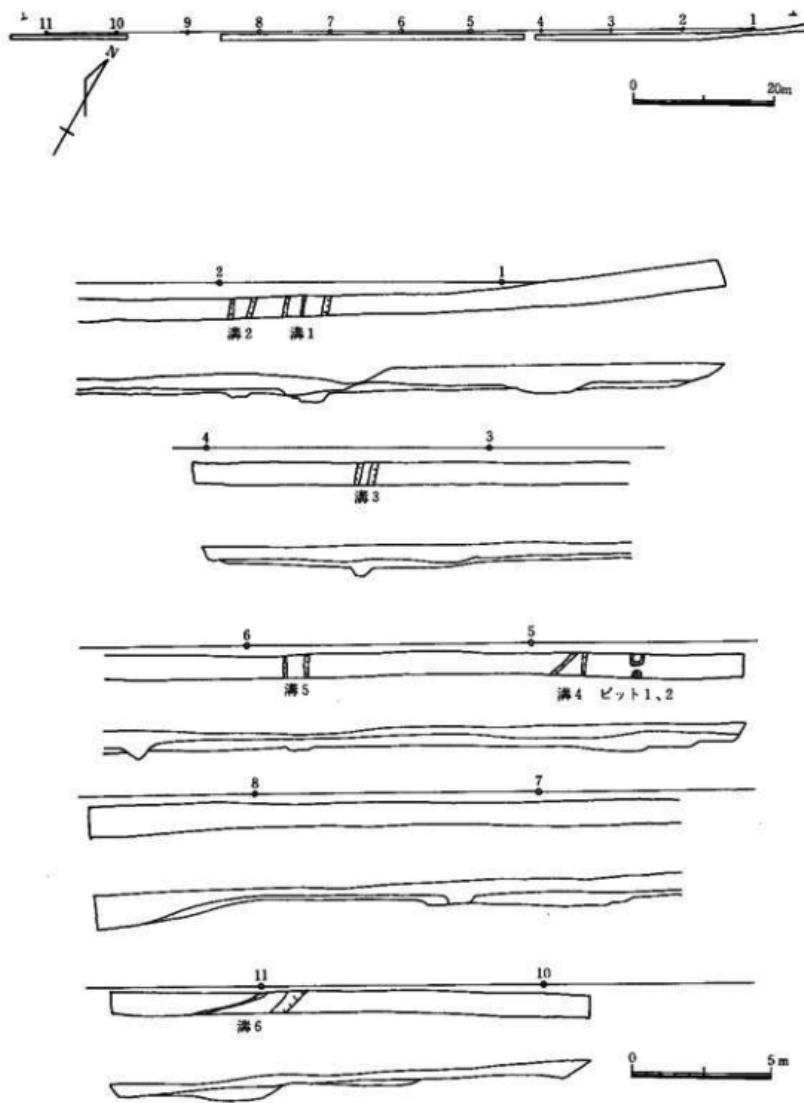


図-18 高井田古墳群

雁多尾畠古墳群

80-1次調査

調査地区所在地

柏原市雁多尾畠3842番地他

調査担当者

竹下 賢

調査期間

昭和55年10月1日～20日

調査面積

26m² / 50m²



図-19 調査地区附近地図

調査に至る経過

当該地域は平尾山古墳群内の雁多尾畠支群にあたり、現地踏査の結果、墳丘の盛土は既に流失して玄室部天井石が露出し、羨道部が失なわれ、開口している古墳が一基存していた。石室内には土砂が堆積しており、内部は農具入れとして時に利用された様子であった露呈している玄室の天井石を橋のように利用した状況で里道が付けられていた。大阪府文化財保護課による平尾山古墳群分布調査報告によると雁多尾畠11支群6号と認められた。天井石を支える側壁の石が重量により削れてきており、放置すると崩壊する可能性が認められたので、保護策を策定のためと、この古墳が青少年教育キャンプ場内に位置するため社会教育の一環として市民に公開をはかりたいと考えて、石室内を見学できるようにするため調査をすることとした。

調査経過

調査は石室内の堆積土の撤出からはじめた。当初、石室が開口していることから、遺物の遺存はないものと考えられた。調査の進展により遺物の遺存することが知られるに至った。石室については西側に袖を持つ片袖で、玄室の規模は奥行き300cm・幅(床面)180cm(天井部)130cm・高さ190cm、羨道部は天井石を失い、側壁石も大半がなくなっていたが、抜き取り跡が検出されたので、幅125cm・長さ370cmのものであると推察される。閉塞の状況については把握されなかった。羨道部入口から外に幅40cm・長さ330cmの溝が検出されたが、石室内については検出されなかった。この溝を中心として直径50cmを測る円形の掘り方が検出されている。石室は地山に100cmの掘り込みをして、奥壁の石を置き、奥から順に

雁多尾畠古墳群

側壁の石を並べて一段目とし、奥壁の構築に従って順に羨道部に向かって積み上げて築造したものと考えられる。奥壁、側壁とともに持ち送りで積み上げているので内傾している。石室の床面には石を敷詰めていたと思われるが、花崗岩質で風化して砂質化していた。また、棺台と認められる石が奥壁際に2個、袖際に1個検出された。石室内には木棺が納められていたようで、鉄製棺釘の出土をみた。棺釘には二種類あり、釘頭部を偏平に叩き延ばして曲げて頭とするものと、釘頭部を円形に作り山形に脇らみをもたせたものがある。いづれも断面方形を呈する。前者が床面の上層から出土し、後者は床面に敷詰めたと思われる石の間から出土している。須恵器の高杯・台付き長頸壺と土師器の把手付き杯・短頸壺および金環各1点が玄室の中央部東壁際からひとかたまりとなった状態で出土した。

羨道部側壁石の確認のため、石室の前面部を埴土中に羨道部内に位置する地点から土師器丸底壺片が出土した。追葬にかかるものと思われるが、土層自体は羨道部を濱した時期のものであると認められる。

墳丘の規模を確認するため、石室を中心に南にのびる里道と東にのびる里道の側面の土を削り土層観察につとめた。その結果、東の側面で石室から約7mの位置に僅かに土層の落ち込みと認められる点が確認された。

雁多尾畠11-6号墳は南北に連なる生駒山地の中で、東に延びる小屋根上の中頃の地点に構築されたもので、周溝は西側上部に存する雁多尾畠11-5号墳との間に設けているものと考えられる。墳丘の規模は直径15m内外のものと推察される。

墳丘北側については耕作地で石室天井石との比高差3.8mを測るもので、既に削られており、墳丘上が流失する状況であったので境界に杭打ちをして横板をいれ盛土をして現状以上に墳丘土の流失することを防いだ。

この古墳の保護方法として石室天井石を支える右側側壁石の一部が割れてきていたのでこれをセメントで巻いて補強し、墳丘土の流失を防ぐため石室前面の斜面にしがらみを組み芝生と市花であるきつきの植生をした。公開の方策としては石室内に約10cmの盛土をして、天井石を支える補助として鉄製柱をいれるとともに扉を設置した。石室前面部については推定ではあるが、墳丘の規模を示すため予測ライン上に植樹した。

遺 物

石室内からは、土師器(1・2)と須恵器(4・5)が出土。1は小型の短頸壺である。口縁部外面にタテ方向のヘラ磨きを施し、体部上半に4方向からのヘラ磨き、下半及び底部には同じく4方向からのヘラ削りを行なった。

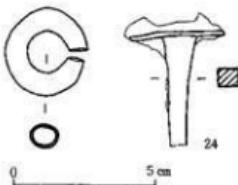


図-20 積状耳飾、鉄釘実測図

ている。2は、把手付きの杯である。外面は上半部に荒いヘラ磨きを施し、下半部及び底部はヘラ削りを行なう。内面に斜放射状暗文を施す。把手は指押えのままである。ともに色調は赤褐色を呈する。4は長脚2段の透し孔を有する高杯である。透し孔は3方向から長方形に開けている。焼成は極めて堅緻、色調は暗灰色を呈する。5は台付き長頸壺である。頸部を一部欠損する。全体に自然釉を厚くかぶっている。時期はともに6世紀中頃から末のものか。3は石室前面から出土した土器器の小型丸底壺である。口縁部を欠損する。指頭圧痕が残り、一部ハケ目調整で仕上げる。全体に磨滅が著しい。口縁部近くに黒斑が認められる。色調は赤褐色を呈する。

鉄釘は61点出土。そのうち頭部の残存するものは24点ある。1～16は頭部が1cm程L字状に折出し、断面は方形を成す。長さが9cm前後のものと12cmをこえるものの2種類あり、使用箇所により使い分けたものと見られる。木目の残存状態から棺材の厚さは2～3cm程度と思われる。17～23の頭部は直径1.4

～1.9cmの円形を成し、山形を呈する。

断面は長方形である。長さは完形品で8.8cmを測るが、それ以上のものもあると見られる。時期は前者に先行し、石室内出土の土器に伴うものと思われる。24は頭部径3.3cmを測り、偏平である。断面は0.8×0.6cmと頭部に対しては細みである。棺蓋に最後に使用したものか。

石室内から銅製の块状の耳飾りが1点、土器に伴って出土している。3.1×2.9cmを測り、断面は1.0×0.7cmとやや梢円である。中空で重さは3.5gと軽い。表面に金箔を施す。

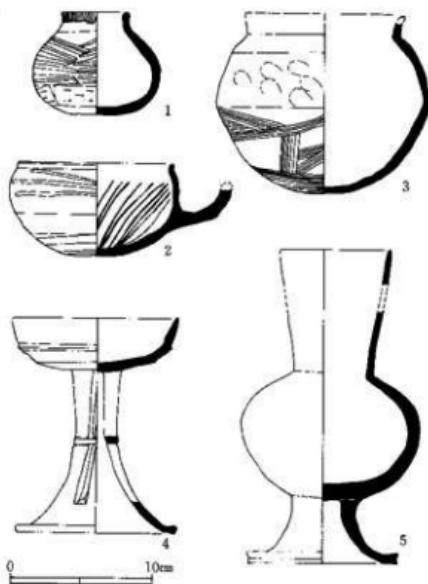


図-21 出土: 器実測図

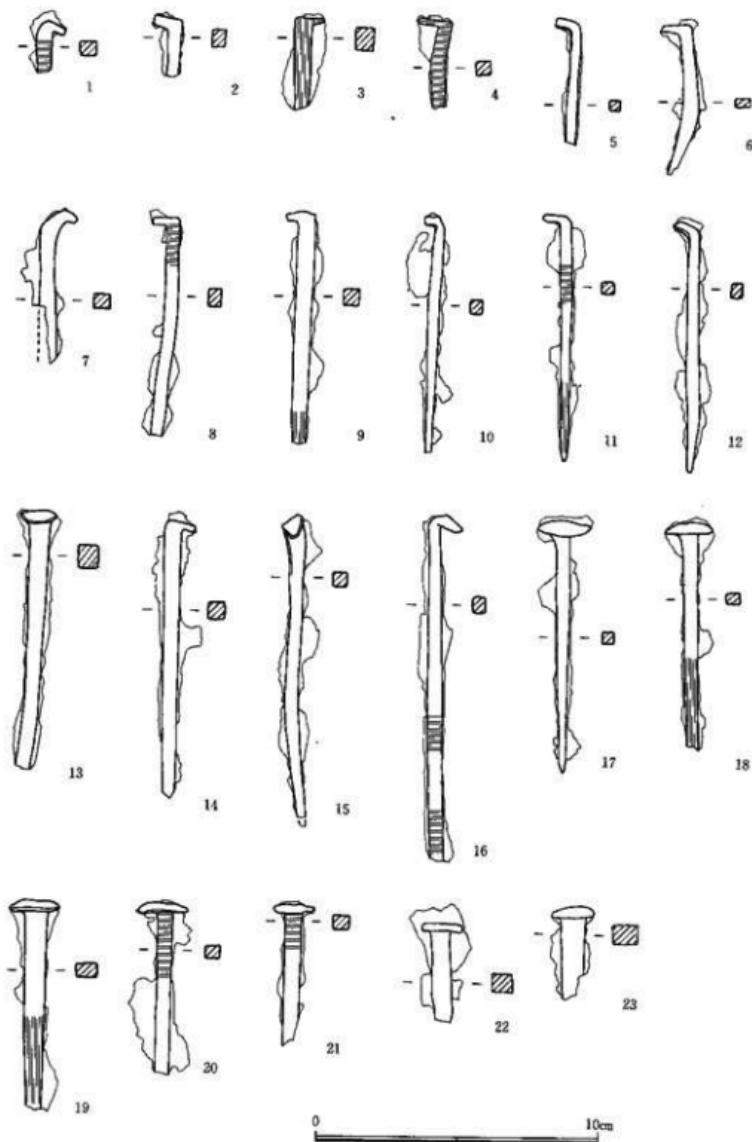
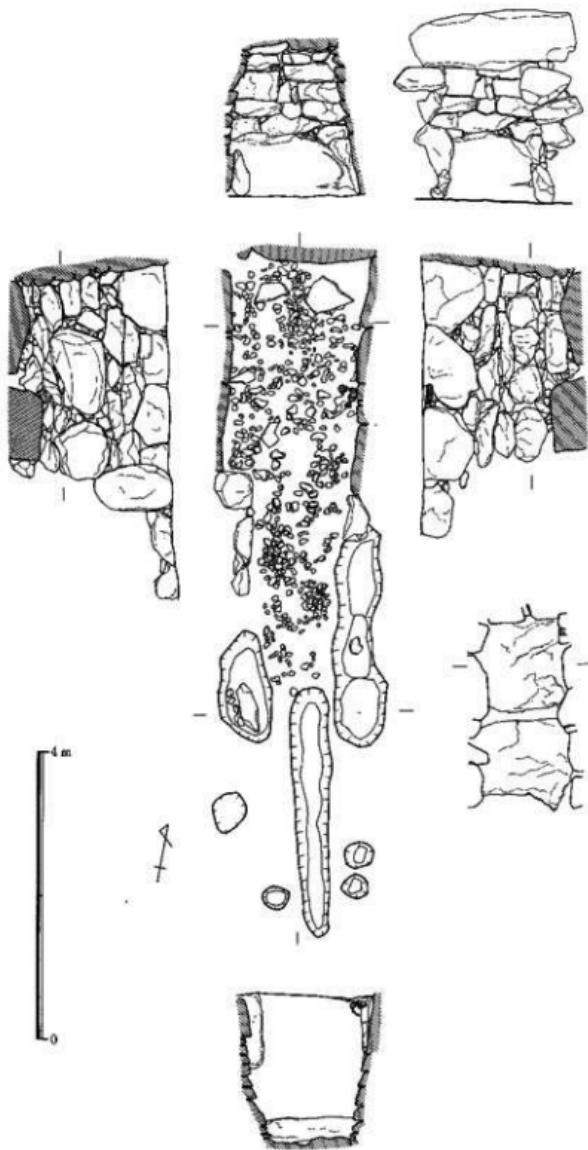


図-22 鉄釘実測図(万線は木目の残存状態を示す)



图—23 6号支群11号墳横穴式石室実測図



東壁



石室正面及び羨道部ぬきとり跡



西壁



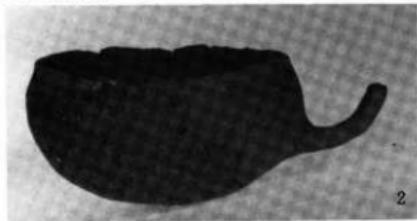
東壁



石室床面(羨道部より)



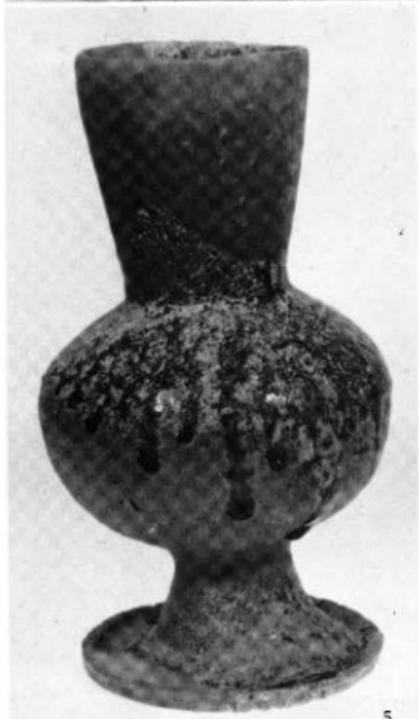
石室遺物出土状況



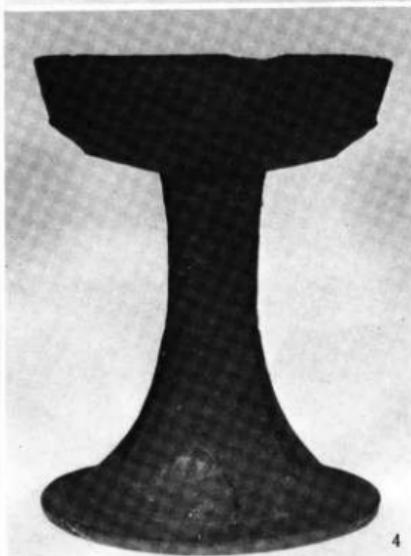
2



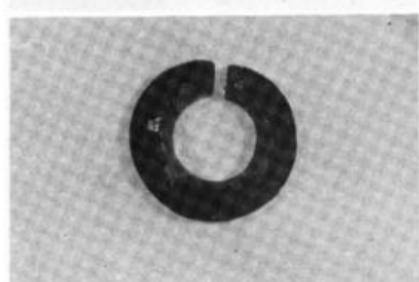
1



5

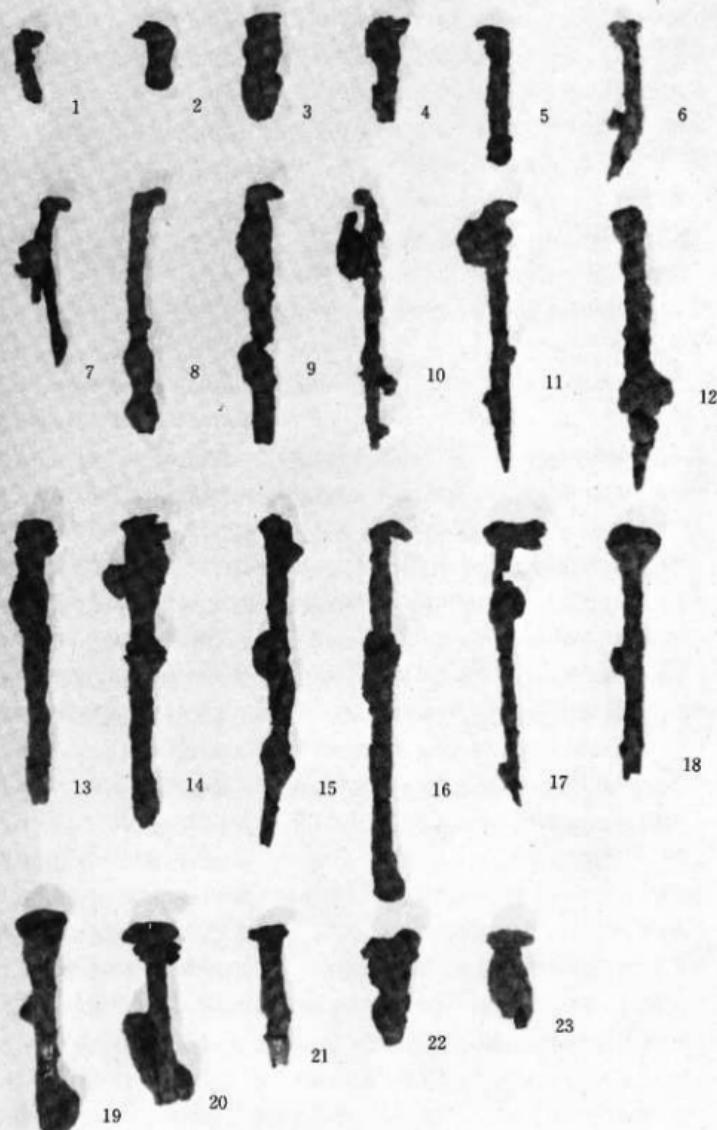


4



24





玉手山古墳群

80—2次調査

- 調査地区所在地
柏原市旭ヶ丘1丁目428—1他
- 調査担当者
竹下 賢
- 調査期間
1980年9月16日～10月3日
- 調査面積
162m² / 1200m²



図-24 調査地区附近地図

調査に至る経過

本調査は柏原市老人福祉センター建設に伴う事前緊急発掘調査として実施したものである。当該地区における埋蔵文化財については、昭和54年度に大阪府文化財保護課の手により事前試掘が実施され、この結果にもとづき古墳の主体部を中心とした保存区域が設定されていた。柏原市では工事着手に先立ち、文化財保護法に基づく発掘通知書を提出し、文化庁の指示により、立会調査を要することとなっていた。工事着手後に柏原市教育委員会に柏原市土地開発公社から工事着手の連絡があった。柏原市教育委員会は大阪府文化財保護課と協議の結果、(1)西側カット部によって、試掘調査により設定した保存区域を破壊されないよう注意すること。(2)遺物包含層の有無を確認すること。の2点を留意点として本市で立会調査を担当することとした。昭和55年9月1日に現地の掘削に立会したところカット部の断面に周溝と思われる落ちこみが認められるとともに遺物の存在が認められた。このため、工事を一時停止するよう指示しておいたが、9月5日 現地に赴いたところ工事は進められており、断面に残置しておいた遺物はなくなっていた。柏原市土地開発公社に抗議するとともに工事の即時停止を申し入れ、大阪府文化財保護課に連絡し、発掘調査の必要であることを確認し、当該建設予定地における緊急発掘調査を実施することとしたものである。建設担当の山田 守建築事務所と調査着手の時期におよび調査中の建設工事に進め方について協議を重ねた結果、西側の既に掘削してしまった部分についてはいまさらどうにもならないのでそのまま工事を進行させること、古墳主体部の東側については資材置き場としている要望が強く、試掘トレンチにより造構の存在が認められなかった場合調査区から外すこととした。なお発掘調査着手は9月16日からと決定した。

調査地の環境

玉手山丘陵はその尾根上に前期の前方後円墳十数基が南北に連なっており、近畿圏下でも有数の前期古墳が集中的に存するところである。これらの古墳も開発により次々に破壊されて現在ではわずかに六基が遺存するにすぎない状況である。本調査地は玉手山丘陵の南端部に近く、玉手山2号墳と玉手山3号墳の間に位置し、地形的には鞍部的な状況を呈するところである。古くは果樹栽培地であったが、大阪府青少年レクレーションハウスが建設された時にキャンプファイヤー用グランドとして削平されたものである。この大阪府青少年レクレーションハウスの建物は玉手山丘陵の東斜面に建設されたもので、この建設時に採集されたサスカイトのハンドアックスが柏原市史第二巻および第四巻に紹介されている。また玉手山3号墳出土と伝えられる割竹型石棺の蓋が近接する安福寺境内に保管されている。

調査日誌

- 9月16日（火）西側断面を削平し、断面実測図作成。
- 9月17日（水）調査区域設定のため掘削重機により試掘トレンチを2ヶ所掘開し、断面観察により調査区域を決定し、資材置き場を確保した。
試掘結果を基に遺物包含層上面の盛土を掘削重機にて除去。
- 9月18日（木）盛土を除去したところ造構ラインが確認できたので、白線をいれ写真撮影をして周溝部と考えられる部分を掘り下げた。
- 9月19日（金）前日に続く作業実施。
- 9月20日（土）周溝の外側に土壤検出。写真撮影実施。
- 9月21日（日）造構実測図作成。
- 9月22日（月）平板実測開始。主体部南半分掘り下げ、東側川原石の石列確認。
- 9月23日（祝）調査区北半分盛土すきとり、周溝及び主体部の石列確認。
- 9月24日（水）雨のため調査中止。
- 9月25日（木）周溝内の掘り下げ。
- 9月26日（金）周溝内の掘り下げ。
- 9月27日（土）雨のため調査中止。
- 9月29日（月）石室内及び周溝内掘り下げ。
- 9月30日（火）写真撮影のため検出構造全体の清掃実施。写真撮影。
- 10月1日（水）石室実測
- 10月2日（木）石室実測
- 10月3日（金）全体実測図確認。調査終了。

遺構

墳丘は既に削平をうけており、造構として、ひとかかえ大の川原石を積む竪穴式石室と考えられる主体部が検出された。この主体部については現状保存することとなっているため、石室の規模を記録するに留めたため床面については完掘しなかった。西側のカット部分で出土をみた土師器の底部一片をとりあげたのみで埋め戻した。

石室は長辺360cm・短辺160cmの掘り方の中に側壁の石を配するもので、石室中軸線でみて方位は磁北から東に57°振っている。壁石の大きさからみて横穴式石室ではなく、竪穴式の小石室と考えられる。天井石はすでに失なわれているので、石室のたちあがりの数値については明確にしえないし、また、床面までの完掘を実施しなかつたため正確なことはいえないが、内法の規模は幅85cm・長さ310cmを計測するもので、この間に埋葬されていたものと推察している。この古墳の時期については、周溝内出土の埴輪片から推測すると玉手山3号墳に近い時期（四世紀末葉）が与えられるが、石室内出土の土師器でみると時期的には下がるものと考えられる。石室内から出土した土師器は器形からみて鍋の底の一部と認められる。出土状況から石室と破壊時期に混入したものと考える方が妥当である。この見解をもって判断すると古墳の時期は周溝内の埴輪で与えられる時期を当ててよいようである。

周溝は外側ラインを観察する限り方形を呈するものである。幅約150cmを測るもので、調

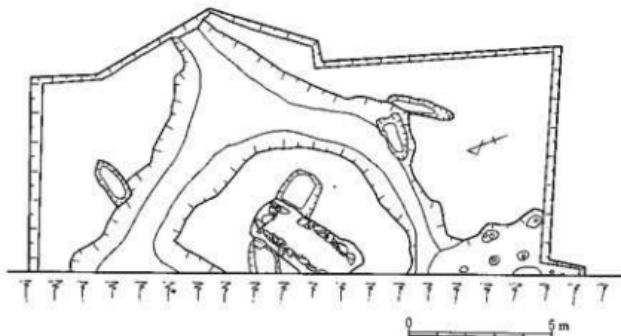


図-25 造構平面図

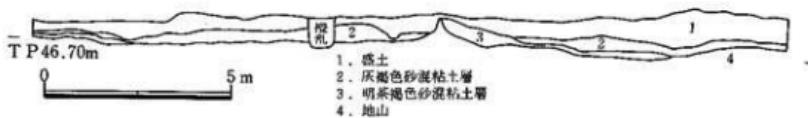


図-26 東壁土層断面図

査区内において、周溝底で石室の東側と南北側で比高差ほぼ120cmを測る。古墳自体が西側斜面に構築されていたことを物語るものであろう。

この周溝内の遺物包含層は二層にわけられ、上層からは須恵器で宝珠摘みの付く蓋や杯土師器片が出土し、下層からは埴輪片が出土している。また、表面が乳白色を呈するサヌカイト片の出土があり、埴丘上面からも同様に非常に風化が進んだ石鐵が一点出土した。当該地はハンドアックスの出土地に近接するもので、旧石器時代や縄文時代の遺構遺物の存在を示唆するものと考えられる。

周溝の外周ライン上に長さ230cm・幅55cmを測る土塁が検出された。土塁内には人頭大の河原石が並べられていた。規模からみて土塁墓と考えられるものである。

今回調査した古墳を玉手山3号北古墳と称することとした。

遺物

・須恵器

杯蓋と杯身が出土した。杯蓋は、内面にかえりをもち、宝珠つまみをもつものである。杯身は平底で直口のものである。いづれも7世紀代に比定できる。

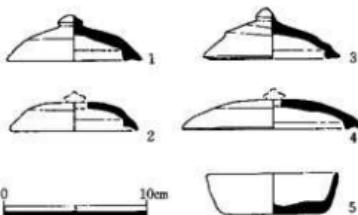


図-28 出土土器実測図

・石器

石鐵が1点出土した。サヌカイトを原石とするもので、色調は灰白色を呈する。長さ2.5cm・幅1.7cmを測る。片方の先端を一部欠損している。雁又の部分はほぼ直角に抉ぐる。時期としては共伴する土器はないが、その風化の進度、形態からみて、縄文時代早期のものと考える。

・埴輪

朝顔型埴輪と円筒埴輪の破片が出土している。どれも細片のため直径を復元することは出来ない。1~3は朝顔型埴輪の口縁部である。1は口縁部に凸帯をもたないので、端部は平垣面を成す。2・3は端部を外側へ屈曲させ下方へ肥厚させる。4は朝顔型埴輪の頭部の破片である。凸帯は断面長方形を呈する。ともに磨滅が著しいため調整は不明である。5は円筒埴輪の破片である。凸帯の断面は正方形に近く、器壁も0.7cmと薄い。調整はヨコハケによる。胎土はすべて粗く、石英や長石を多量に含んでいる。色調は淡赤褐色から淡黄褐色を呈する。また、これらの出土した埴輪には外面に赤色顔料が塗布されていたものもある。



図-27 石鐵実測図

玉手山遺跡

・陶棺

須恵質の陶棺蓋部の破片が1点出土している。ほぼ直角に傾斜する天井部のかどにあたる部分と思われる。外面はカキ目により調整し、内面は荒いハケ目による。色調は暗灰色を呈し、焼成もきわめて堅緻である。外面に灰をかぶる。

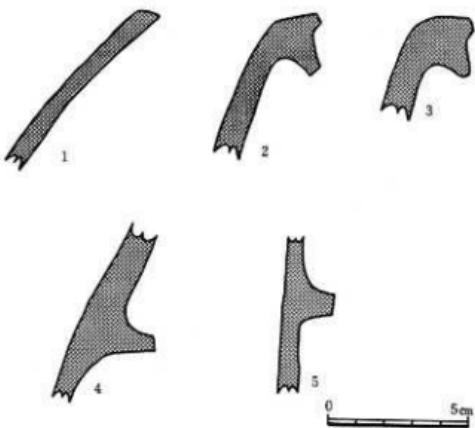
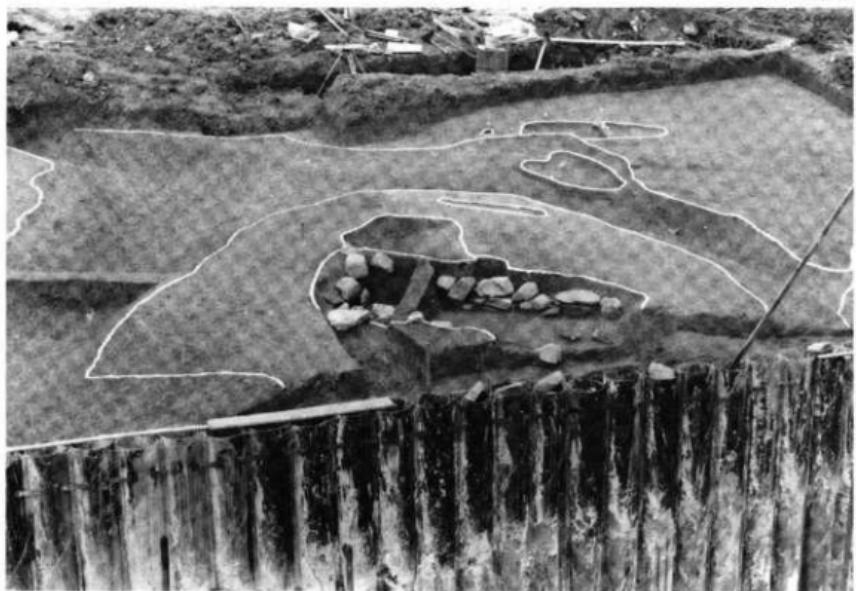
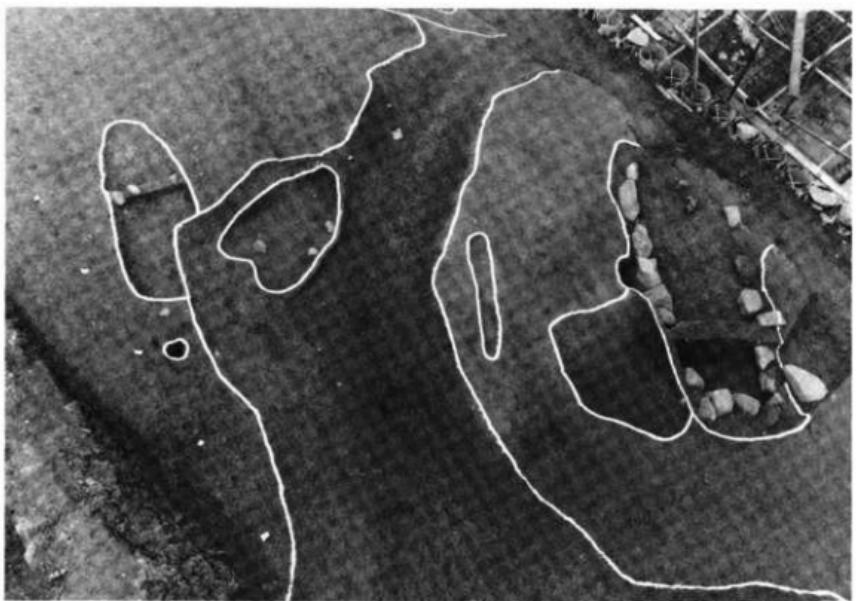


図-29 出土朝傾型埴輪、円筒埴輪実測図



調査区全景(西より)



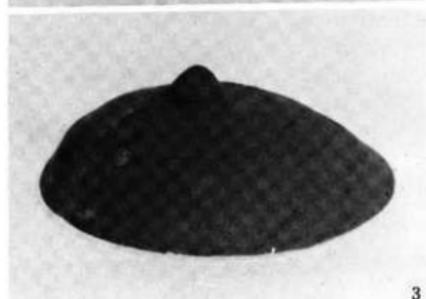
南側周濠検出状況



1



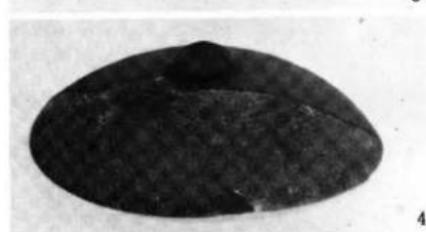
1



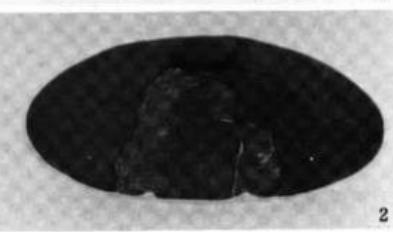
3



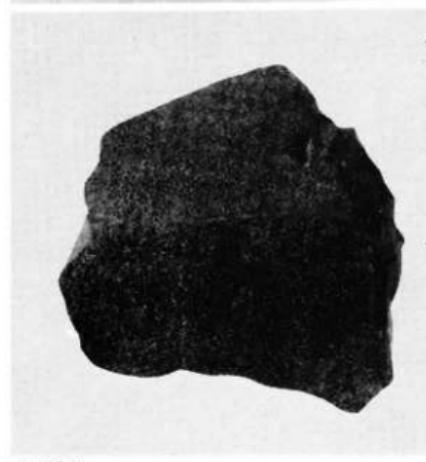
5



4



2



—





1



4

出土埴輪片



3



2



5

出土埴輪片

田辺遺跡

80—1次調査

・調査地区所在地

柏原市田辺二丁目4590—3

・調査担当者

竹下 賢

・調査期間

昭和55年 7月25日～8月18日

・調査面積

70m² / 813m²



図-30 調査地区附近地図

調査に至る経過

当該地区は弥生時代遺物散布地として大阪府文化財分布図に記されている地区であったが、遺跡の性格については明確なものでなかった。個人住宅建設に先立ち、あーる建築事務所 坂内氏と協議した結果、試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認された場合に発掘調査をすることとした。昭和55年7月25日、ガレージに当たる部分を掘削重機で試掘したところ、溝状遺構と遺構上面の遺物包含層を確認したので、発掘調査に切り替えたものである。即日、包含層上面の表土のすきとりをして、できるだけ調査期間の短縮をはかって発掘することとした。

調査日誌

7月25日（金）工事着手に際し、ガレージ予定部分の一部を掘削重機にて掘削したところ溝状遺構及び須恵器片の遺物の存在が確認される。発掘調査の必要を認め、即日重機により表土層のすきとりを実施した。

7月26日（土）すきとり後の残土を除去し、遺構の検出作業に着手した。午後雨のため作業中止。

7月28日（月）遺構検出のため削平。

7月29日（火）遺構検出のため削平。

7月30日（水）溝状遺構検出、石灰でラインをいれて記録写真撮影。午後雨のために出土遺物洗浄。

7月31日（木）溝内の堆積土排出。

8月1日（金）溝内の堆積土排出。

造構写真撮影。

8月2日（土）造構面削付。実測。

8月4日（月）実測図にレベル数値をいれる。南側土壤内に遺物検出。

8月5日（火）南側土壤ほりさげ。

北側土壤ほりさげ。

写真撮影の後遺物と
りあげ。

8月6日（水）両方の土壤完掘。

8月7・8・9・10日 調査補助員
夏期休暇のため調査も休みとした。

8月11日（月）調査区を北側に拡張
し、荒掘開始。

8月12日（火）拡張部ガリかけ。旧ブドウ畠の石垣を確認。北側に落ち込み確認。

8月13日（水）拡張部に検出された土壤ほりさげ。黄色砂質粘土からブレとおもわれる
表面乳白色に風化したサヌカイト剝片出土。

8月14日（木）拡張部ほりさげ。石垣の裏込め土からも遺物出土。写真撮影。

8月15日（金）サヌカイト片出土地点ほりさげ。チッピングフレークが面的に出土。平
板実測。調査区東壁面断面実測。

8月16日（土）黄色砂質粘土層ほりさげ。

8月18日（月）黄色砂質粘土層ほりさげ。雁又の石器出土。黄色砂質土層たちわり。蓋
杯出土。調査終了。

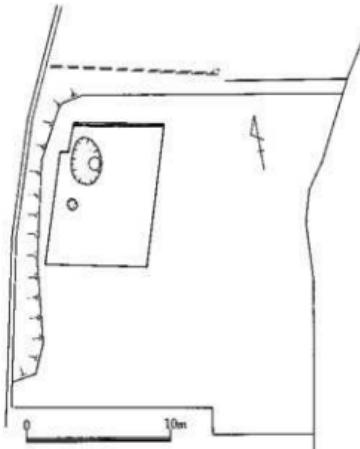


図-31 造構平面図

造 構

造構としては幅45cmを測る溝状造構が調査区の東西に4条検出された。この造構内からは須恵器・土師器片が出土したが、いづれも細片であった。直径90cmを測る土壤が三ヶ所検出された。その性格については明らかにしないものであるが、土壤内出土遺物は須恵器の平瓶がその大半をしめている。黄色砂質土層内に大きな落ち込みを確認した。この土層内から杯身に小石を納め宝珠摘みをもつ蓋をしたセットで遺物が出土した。祭祀的性格をもつものであろう。黄色砂質粘土層内から表面乳白色に風化したサヌカイト剝片やチッピングフレークの出土があり、旧石器の石器製作跡かと考えて調査を進めていたと

田辺遺跡

ころ風化の度合は同様な雁又の石鎌が出土した。この石鎌の時期は縄文時代前期頃に考えられるべきものとおもわれるが、土器の共伴がなかったので今後の調査に待ちたい。



図-32 東駿土層断面図

遺物

1は土師器の杯。内面に斜放射暗文を施す。2は須恵器の杯蓋である。内面にかえりをもち、宝珠形のつまみがつく。天井部から $\frac{1}{3}$ 程を回転ヘラ削りする。3は2とセットで出土した須恵器の杯である。平坦な底部からやや内窵して口縁部につづき端部は外反する。底部外面にヘラ切り痕をとどめる。焼成はやや軟質で淡灰褐色を呈する。4～9は平瓶である。総て肩部が張らず丸みをもつものである。底部から $\frac{1}{3}$ 程までヘラ削りを施す。5・6・8は頸部がラッパ状にひろがり、5は頸部上位に一一条の沈線を巡らせる。4・7はやや直立する口頸部をもつ。4は頸部上位と下端にそれぞれ一条の沈線を巡らす。10は須恵器の高杯。杯部はなだらかに内窵しながら口縁部につづき端部は丸く納める。大きくひろがる脚部は中位に一条の沈線を巡らせる。杯部内外面及び脚部外面に自然釉をかぶる。時期はともに7世紀前半のころか。

縄文時代前期の石鎌が1点出土している。直角に大きく抉ぐる。長さ1.9cm幅2.0cmを測り、先端部分を少し欠く。灰褐色を呈し、サスカイト製。



図-33 石鎌実測図

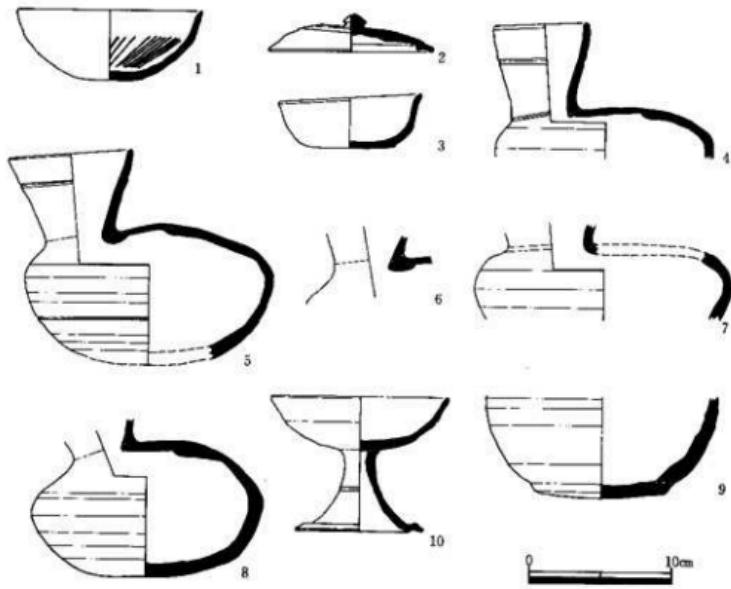
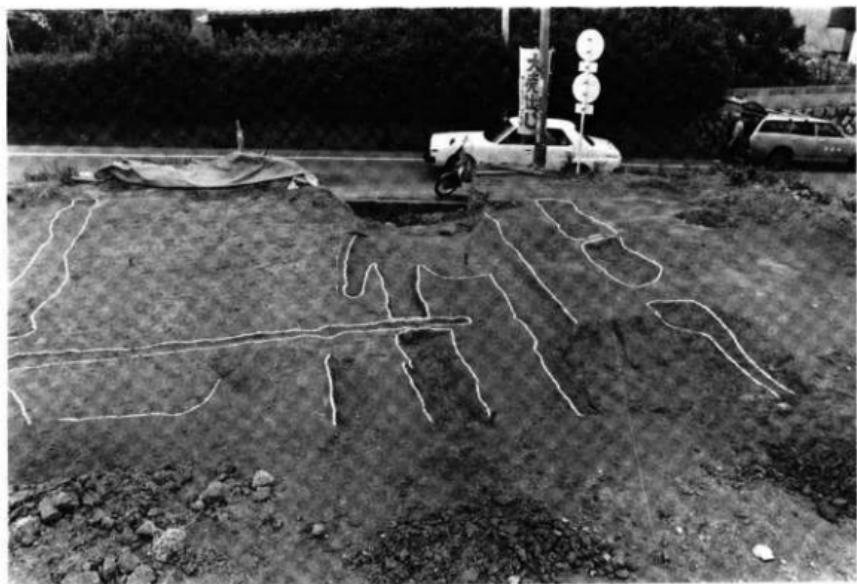
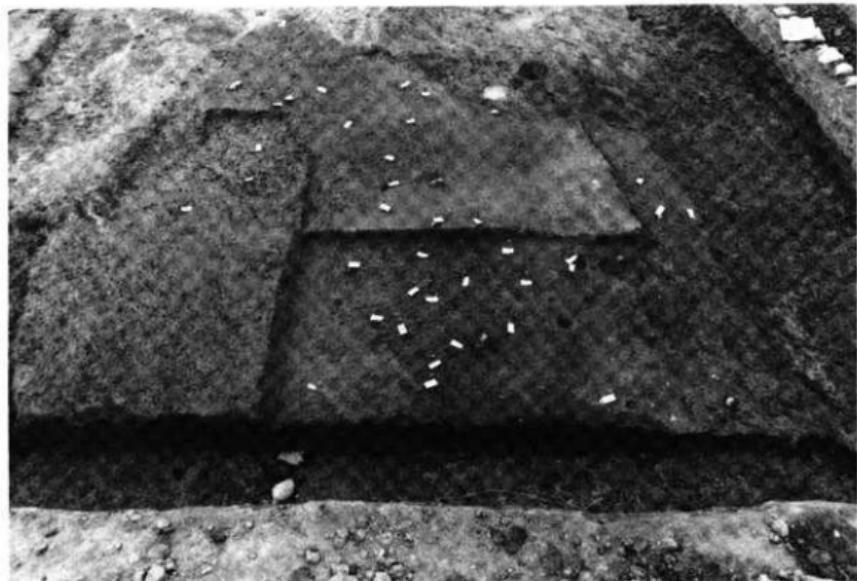


図-34 出土土器実測図

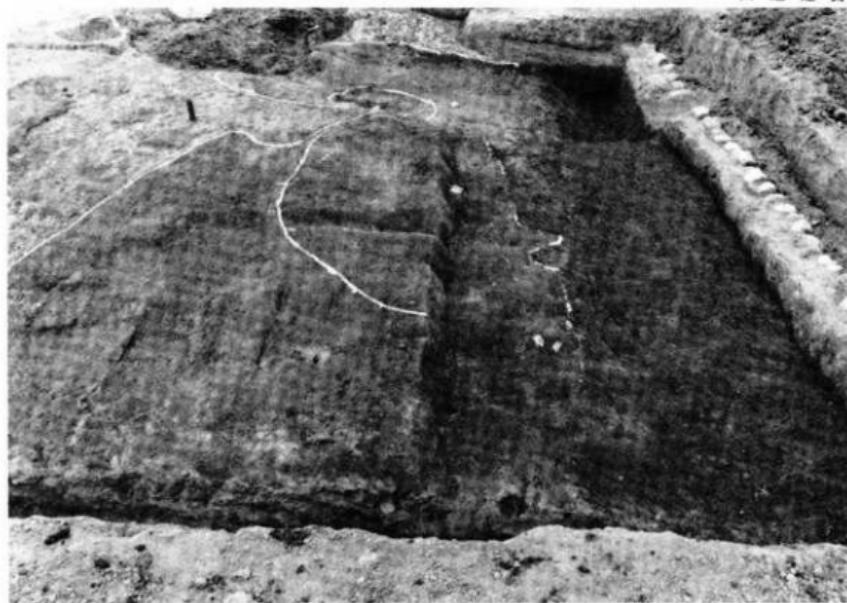
田辺遺跡



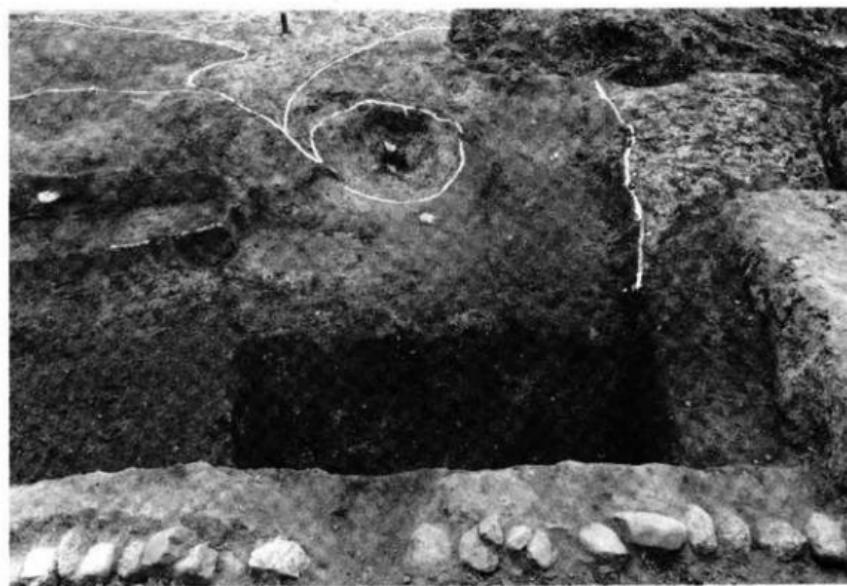
調査区(東より)



チッピングフレーク検出状況



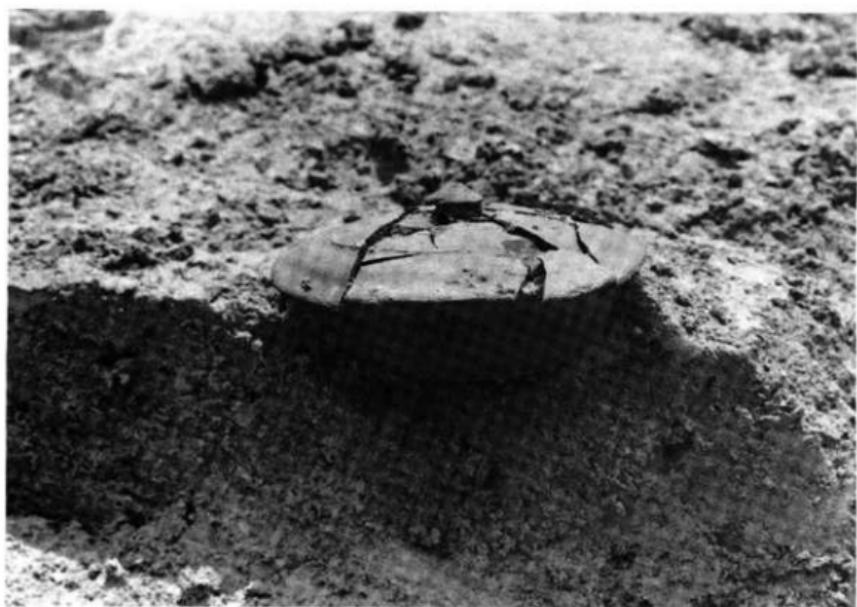
調査区北半



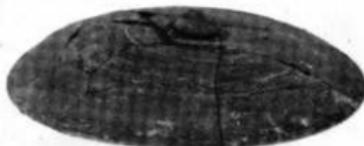
調査区北西隅土壤検出状況



土壤中遗物出土状况



盖付杯出土状况



2



3



4



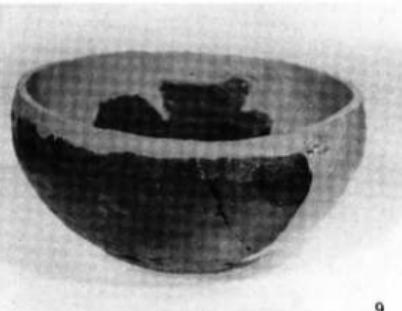
4



7

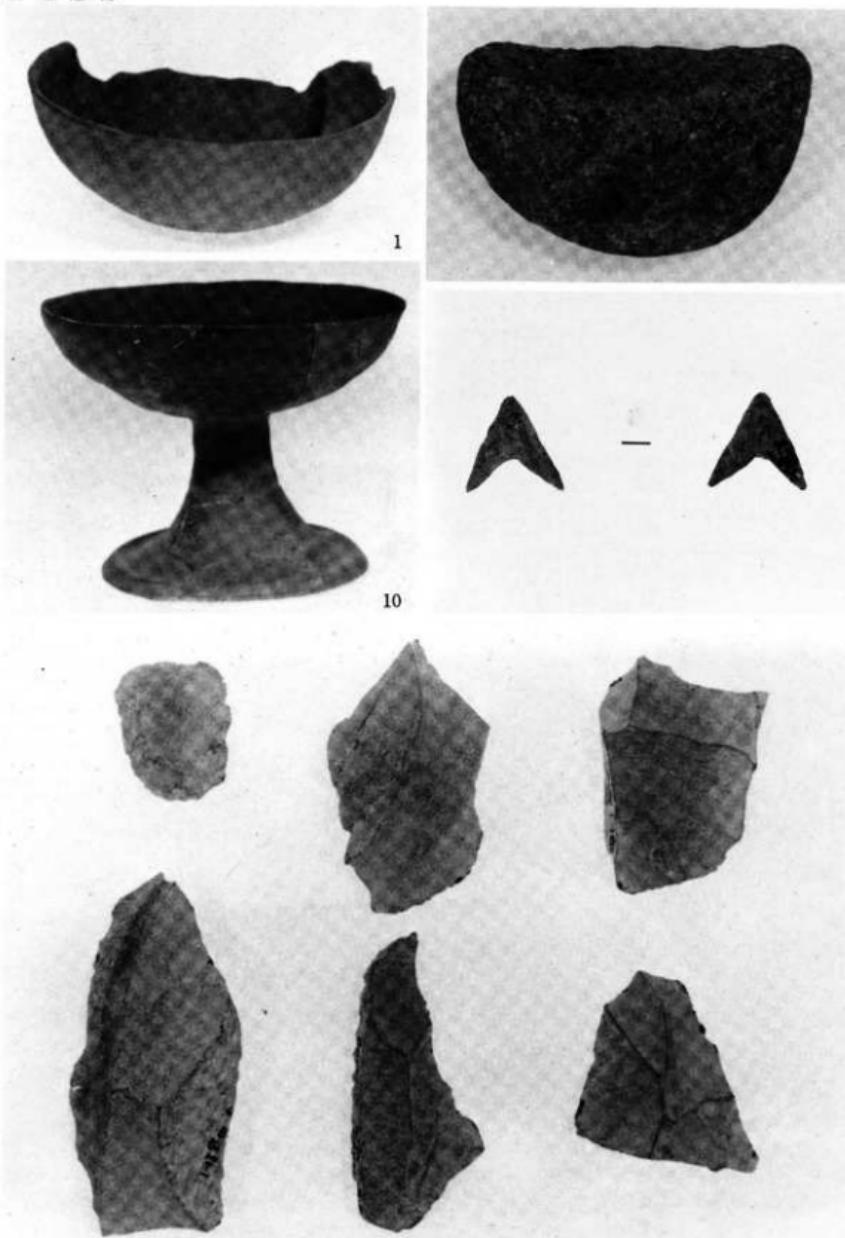


5



9

出土遺物



柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1980年度

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内 716

発行年月日 昭和55年3月31日

印 刷 K.K 中島弘文堂印刷所

